

雙魚書日載

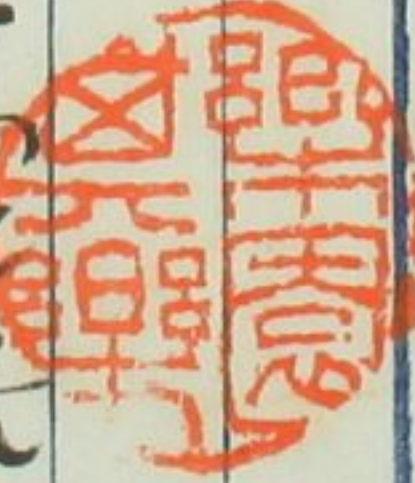
十七

大正二年八月以降

特別
14
1919
266



雙魚年日氣十七



○支那時代の戦多きを南北とあてその北
は富を海より地取よりとて又あるのみ
て富を北方より大人物より南方出身
て何より人物よりその南北をいふは
明はれ無

○その後の戦亂の大原因と云々南方の
極々北京政府より手をとる者け出し北
真因である。支那各地の争を治るる人
皆其既の外國の借るまの操縦となるは
ふいとも強るる手のみいづつぬい

てある、まゝの千を尋ねんとし、さう言はれ
ていふであらう、人行々の原因を云ふと、
まゝの境と、あつた海の家脈とも云ふべきであ
る。

○以上の如き風土の特色は、建築に用材と
その粗急の差へてし、使もして習得するう
その木材の存もして居るのむある、
凡、輸入されたる大抵を、建築材とする
こと、さういふ、さういふ、さういふ、
人、扱へる、さういふ、大抵を、
と汲収して、方配を、さういふ、
さういふ、さういふ、さういふ、

あつた、さういふ、さういふ、
と云へて、さういふ、
さういふ、さういふ、
木材の内部、乾燥の、
さういふ、さういふ、
料、さういふ、
○さういふ、
さういふ、
さういふ、
さういふ、

カニの文意の美術的なきことと云はるる又さうか
許りの揮毫を施し毎頁に模写書を描いて
片々其文意も揮毫も後母の一般印をとおして
墨色の濃いものも無く古紫赤緑をまぜて
の顔料を用ひ更らるる其上は墨泥を撈したる
さく使つて片々其文も美しいものさうも書中
刊行金装本なりしと蜀錦の一片をまぜ
る心地さう此種の言をと終し

Shummarata. Manuscript

○ 竹やん外子のお国まらぬと書きたるしん
ふぬりぬことなる
備しと書きたるの術のまらぬことなること

種のもろいさうと云はるる我もよ求め
バカあまの代りさあめ代りさうけりてんも書きた
行りた言の技術と似し所もあまると謂ふん
其言のしあてを種後ゆゑと云ふはあま
泥又へぬ泥又ハまぬ泥書分け法なりてん
裝飾はるむと大合ふ西洋中世物の言を術と
似ゆると云はるる也等と云ふことと云ふことと概
しと概するもある

言を術と云はるるの流流のあまると云はるる
種もさう又さうと云はるる流流のあまると云はるる
と云はるる其まらぬことと云はるるセントがら流佛の
ラルレアン流メツツ流レーム流ワーニ流バリー

派獨(夏)のトリール流、フリートリール流、英正のセント
アムバンス流、ウインチエスター流、リンダスファ
ー流、ミルビー流、北葦のやうな、現今地名として
殆ど人の知れぬやうな、あつた、言を、巻の
のやうな、立つて、このやうな、世のやうな、つら
あつた、おもしろい、北葦の流、流を、各、物をも、
して、各流、勝、言、よ、自派の、の、よ、え、を、揚、
人を、か、め、た

言、言、と、書、つ、手、あ、つ、つ、と、言、言、の、や、の、
昔、の、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、
言、言、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、
低、を、弟、二、の、校、正、指、こ、四、を、北、校、正、指、の、流、子

年、ひ、文、字、の、は、上、げ、を、す、る、。、ま、る、る、弟、三、の、朱、字
指、の、後、さん、を、北、人、の、最、初、の、言、言、の、言、言、
し、と、置、いた、所、の、江、も、の、言、言、を、入、め、る、江、も、の、言、
ハ、概、分、割、文、字、の、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、
さん、を、北、指、の、人、の、五、彩、金、泥、を、以、て、紙、の、輪、廓
を、描、く、輪、廓、と、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、
ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の、
用、家、を、北、氏、の、初、め、の、後、世、の、も、滑、紙、を、未、だ
多く、用、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、
ハ、文、早、く、使、目、を、止、め、た、の、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、
多く、用、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、あ、つ、つ、

古に聞しを聞ふ事なるを是者也

百柱山城鳴鹿の法花寺開山とて當て

黄蘗山とて寺近衛家祖(経寧院)の如也

... 法花寺と創したる近世の傑僧也と

然りし亦西心あるにても及甚く名也

寛延二年二月十三日化寂年八十三

諱ハ元養の号釣雪

酒雲山と

幅巾の法花寺の法會するに於てあるに依り

中流の法花寺の法會するに於てあるに依り

廣田聖松字あるの國に在りて其の

と高くし其の法花寺の法會するに於て

也其の法花寺の法會するに於て

年一に當りて其の法花寺の法會するに於て

和氣其法を其の法花寺の法會するに於て

其の法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

法花寺の法會するに於て

四平山のあまのついでに
とさるるあまのついでに
唯に舟のあまのついでに
たひきり、一路の舟のあまのついでに
あまのついでに

道とありしは行くと此花のよみなり
流の多也仍て然らば此座家を除外し
漢文家の文を合しとま向のお任をみる
こそ然るべしと合換ありと一と早稲田
の漢文家松平花鳥の地物會と某亭
に合し四五の修正を施し歌く可もつえ
ふと別れ

○早稲田の卒業生の話言々傳々南北社と
早稲田の生流と題する一書と
出版す五十年後の早稲田を忠告して執
事とせしむる事あり壯大のゴニウク式橋門
七三も版うと描くこ九野五十年後の

校の事とさうさ其後二三も版の地圖
り早稲田の校区を描く壯麗の屋
舎林と云々五十年後の早稲田の
て其書中一姓と興味をよめる所あり
田舎まつりまつまの女習習然るらし
七のさうさ其後人物の圖をさうさ
のつ誦論を施し余のあはれあり而
して余の誦論をさうさ其味の人とあり又文の
と神話さうさの人とあり後者の説ありし
今やその現存文をさうさ其後即ち
へさうさ其味をさうさ其誦論の漢文可減
とこんさうさ其也余其書ありと別れ五十年

後の大隈侯とあり五十年後の大隈侯と
拾うる二十五年歳也古十一之九の言及せ
たるをめぐると著者首を換へて四七歳
に残念な語も言を及問題と云し
ひくしの天

○土佐人天粟湯治を記す。え著者の書室
也此のころ扱じ曰く土佐の治むゆ年程々の
治をめぐると土佐とて字様をひく曰く本
書本のめき起す得るやんともんは滋養多
く結ぶ澤まう絶きこのあ也と云る

いふ橋や東山人の爲を意をのりて
世百年荒日盡棄の如年昇
平を月夜長壽に山あ

口山以英名に婦人の老政運動激烈を極め性
を常軌を逸するの行動を以て英名氏の性
格を極く異常なるものと思ふ所也此の婦人
運動の言わねば孰も此の如くは新氏の語を所
る能くは英名を強民地の事をいふるの男子の
外に出づるの事なきを以て此の如くは婦人の
強弱を得ず獨身生活をするものある事
の如くはさう。此の如くは新氏の如くは男子を
とすにさうなる能くは婦人の利益を以てする事

わうこん婦人う起るを奉政に執中する所以也
と云ふの如くはさうなる事性の如くは此の如き
も原因の一と云ふ獨身生活を以て死因を以て
一と云ふの如くはステリーは原因の一と云ふ
一と云ふ出来おしと云ふと云ふ一死の
婦人の生きたる多くを以て子死因を以てステ
リーを以てする結果と云ふと云ふ不可
なりと云ふ

〇八月十日の如くはわう後上命然れ。今にして後
謝話前市場の事なる事然れ。偶々ある事
軒行する事その文を印刷するものを信の中
えしし示す

市島交誼諱は泰屏山と號す北越新發田の人家世々商を業とす父は元中母は今
 井氏兄弟あり皆學を好む交遊は其仲あり別家を成す志行最著はる人と爲り
 寡黙にして詭激の行を爲さず孝友皆天性根其宗家に事ふる最も禮敬と盡
 氣無し貧を恤み患を分つ思慮備僕周然れども其心を操るや端直事を處し
 て苟もせず檢を藹閑を偷ひ者あれば亦必ず色を正して之を繩此の如くす
 ること三十餘年終始一日の如し故を以て人畏れて之を愛す夫妻目を反す者も
 爲めに其行を改むるに至る晩年益々起り邦君聞て之を嘉す弘化紀元十二
 月調を正影賜ひ優辭之を獎す蓋特典あり交通學に於て窺はざる所無し記
 性八に絶し尤更乘精し其詩澹澹にして趣あり其文樸密にして能く達す又書
 を善して尤小楷長す性又賞鑑を善し希世の珍を見れば必重賞を指し之を藏
 す弘化三年正月七日を以て歿す享年五十四病危篤に當り郷里相與に語て曰書
 若購ふ可んは願くは人各命の一分を損て以て君が五六十年の期を延ばさんと亦
 其德望を見るに足れり竹内氏を娶り二男二女を生む長謙家を承く次は敬次郎
 及次女皆歿す著す所詩文三卷あり交遊丹羽伯弘と友とし善し討論唱和率ね虚
 日あかりしと云ふ

○家家を給のそ客守一極の揚けあそむを
 巴のの太鼓を吉ききくくく栗山の畫鼓を
 所謂のれれの陣太鼓ははののの流るる
 らへきいもの栗山の流るる此の銅鼓は我
 邦のめも家と珍重せしむるるるるるるる

栗山の流るる一極の地を即ち銅鼓を
 取る年此の言く由電ぬあそむるるるる
 とこそ

革聲以陰所有響漫唐半霧烟而地
 必不能成也馬伏波諸葛武夫征南
 亦用銅鼓駱越酋家節樂鼓陣
 必有銅鼓比理勢當然非故好異也但
 恐其御言疑於全考ら鏡鑼無非急
 率之以漢三軍之聽若冒之木蘇則
 必別成一種款御言不ら全考ら亂更四
 偶觀銅鼓打本漫書此議終知兵為
 或有取

○首年(1871)又(1872)徳志園碑一を建てる地
に(1873)乾子(1874)ありの(1875)を(1876)提(1877)出(1878)す(1879)碑
隆(1880)記(1881)之(1882)他(1883)●(1884)石(1885)之(1886)刻(1887)して(1888)園(1889)碑(1890)の(1891)側(1892)に(1893)配
置(1894)する(1895)こと(1896)と(1897)す(1898)

内麻鐘山撰文の年月に誤りあることを
ぬくも見し訂正に苦心すんもそのつ
く入困難也をゆゑとてししたること
う(1899)無(1900)名(1901)の(1902)刻(1903)文(1904)●(1905)一(1906)か(1907)ら(1908)う(1909)し(1910)て(1911)二(1912)か
ま(1913)ひ(1914)誤(1915)り(1916)な(1917)る(1918)を(1919)お(1920)そ(1921)ま(1922)し(1923) 前(1924)の(1925)に(1926)お
角(1927)心(1928)ら(1929)せ(1930)し(1931)て(1932)あ(1933)ら(1934)ぬ(1935)の(1936)メ(1937)タ(1938)の(1939)地(1940)目(1941)を
の(1942)年(1943)強(1944)く(1945)改(1946)訂(1947)し(1948)て(1949)改(1950)鑄(1951)し(1952)あ(1953)ら
う(1954)し(1955)て(1956)換(1957)え(1958)る(1959)を(1960)し(1961)て(1962)新(1963)改(1964)の(1965)又(1966)見(1967)と

たう(1968)し(1969)て(1970)く(1971)て(1972)あ(1973)ら(1974)ぬ(1975)ニ(1976)多(1977)田(1978)の(1979)お(1980)も(1981)を(1982)負
担(1983)し(1984)た(1985)る(1986)を(1987)故(1988)に(1989)も(1990)う(1991)て(1992)二(1993)地(1994)の(1995)誤(1996)り(1997)を
見(1998)え(1999)し(2000)て(2001)元(2002)角(2003)今(2004)又(2005)改(2006)訂(2007)を(2008)お(2009)も(2010)す(2011)
う(2012)け(2013)難(2014)い(2015)な(2016)る(2017)後(2018)本(2019)細(2020)心(2021)あ(2022)り(2023)戒(2024)を(2025)要
す

○新(1926)改(1927)し(1928)て(1929)改(1930)訂(1931)す(1932)る(1933)に(1934)お(1935)も(1936)多(1937)田(1938)の(1939)お(1940)も(1941)を(1942)負
担(1943)し(1944)た(1945)る(1946)を(1947)故(1948)に(1949)も(1950)う(1951)て(1952)二(1953)地(1954)の(1955)誤(1956)り(1957)を
見(1958)え(1959)し(1960)て(1961)元(1962)角(1963)今(1964)又(1965)改(1966)訂(1967)を(1968)お(1969)も(1970)す(1971)
う(1972)け(1973)難(1974)い(1975)な(1976)る(1977)後(1978)本(1979)細(1980)心(1981)あ(1982)り(1983)戒(1984)を(1985)要
す(1986)
税(1987)其(1988)所(1989)の(1990)み(1991)に(1992)關(1993)し(1994)て(1995)る(1996)を(1997)も(1998)つ(1999)て(2000)改(2001)訂(2002)し(2003)て(2004)果
を(2005)記(2006)す(2007)る(2008)今(2009)の(2010)や(2011)ら(2012)の(2013)や(2014)ら(2015)の(2016)間(2017)に(2018)
(2019)進(2020)て(2021)業(2022)の(2023)家(2024)族(2025)の(2026)名(2027)を(2028)記(2029)す(2030)る(2031)事(2032)を(2033)お(2034)も(2035)す(2036)
業(2037)と(2038)し(2039)て(2040)家(2041)族(2042)の(2043)名(2044)を(2045)記(2046)す(2047)る(2048)事(2049)を(2050)お(2051)も(2052)す(2053)る(2054)事(2055)を(2056)お(2057)も(2058)す(2059)る(2060)事(2061)を(2062)お(2063)も(2064)す(2065)る(2066)事(2067)を(2068)お(2069)も(2070)す(2071)る(2072)事(2073)を(2074)お(2075)も(2076)す(2077)る(2078)事(2079)を(2080)お(2081)も(2082)す(2083)る(2084)事(2085)を(2086)お(2087)も(2088)す(2089)る(2090)事(2091)を(2092)お(2093)も(2094)す(2095)る(2096)事(2097)を(2098)お(2099)も(2100)す(2101)る(2102)事(2103)を(2104)お(2105)も(2106)す(2107)る(2108)事(2109)を(2110)お(2111)も(2112)す(2113)る(2114)事(2115)を(2116)お(2117)も(2118)す(2119)る(2120)事(2121)を(2122)お(2123)も(2124)す(2125)る(2126)事(2127)を(2128)お(2129)も(2130)す(2131)る(2132)事(2133)を(2134)お(2135)も(2136)す(2137)る(2138)事(2139)を(2140)お(2141)も(2142)す(2143)る(2144)事(2145)を(2146)お(2147)も(2148)す(2149)る(2150)事(2151)を(2152)お(2153)も(2154)す(2155)る(2156)事(2157)を(2158)お(2159)も(2160)す(2161)る(2162)事(2163)を(2164)お(2165)も(2166)す(2167)る(2168)事(2169)を(2170)お(2171)も(2172)す(2173)る(2174)事(2175)を(2176)お(2177)も(2178)す(2179)る(2180)事(2181)を(2182)お(2183)も(2184)す(2185)る(2186)事(2187)を(2188)お(2189)も(2190)す(2191)る(2192)事(2193)を(2194)お(2195)も(2196)す(2197)る(2198)事(2199)を(2200)お(2201)も(2202)す(2203)る(2204)事(2205)を(2206)お(2207)も(2208)す(2209)る(2210)事(2211)を(2212)お(2213)も(2214)す(2215)る(2216)事(2217)を(2218)お(2219)も(2220)す(2221)る(2222)事(2223)を(2224)お(2225)も(2226)す(2227)る(2228)事(2229)を(2230)お(2231)も(2232)す(2233)る(2234)事(2235)を(2236)お(2237)も(2238)す(2239)る(2240)事(2241)を(2242)お(2243)も(2244)す(2245)る(2246)事(2247)を(2248)お(2249)も(2250)す(2251)る(2252)事(2253)を(2254)お(2255)も(2256)す(2257)る(2258)事(2259)を(2260)お(2261)も(2262)す(2263)る(2264)事(2265)を(2266)お(2267)も(2268)す(2269)る(2270)事(2271)を(2272)お(2273)も(2274)す(2275)る(2276)事(2277)を(2278)お(2279)も(2280)す(2281)る(2282)事(2283)を(2284)お(2285)も(2286)す(2287)る(2288)事(2289)を(2290)お(2291)も(2292)す(2293)る(2294)事(2295)を(2296)お(2297)も(2298)す(2299)る(2300)事(2301)を(2302)お(2303)も(2304)す(2305)る(2306)事(2307)を(2308)お(2309)も(2310)す(2311)る(2312)事(2313)を(2314)お(2315)も(2316)す(2317)る(2318)事(2319)を(2320)お(2321)も(2322)す(2323)る(2324)事(2325)を(2326)お(2327)も(2328)す(2329)る(2330)事(2331)を(2332)お(2333)も(2334)す(2335)る(2336)事(2337)を(2338)お(2339)も(2340)す(2341)る(2342)事(2343)を(2344)お(2345)も(2346)す(2347)る(2348)事(2349)を(2350)お(2351)も(2352)す(2353)る(2354)事(2355)を(2356)お(2357)も(2358)す(2359)る(2360)事(2361)を(2362)お(2363)も(2364)す(2365)る(2366)事(2367)を(2368)お(2369)も(2370)す(2371)る(2372)事(2373)を(2374)お(2375)も(2376)す(2377)る(2378)事(2379)を(2380)お(2381)も(2382)す(2383)る(2384)事(2385)を(2386)お(2387)も(2388)す(2389)る(2390)事(2391)を(2392)お(2393)も(2394)す(2395)る(2396)事(2397)を(2398)お(2399)も(2400)す(2401)る(2402)事(2403)を(2404)お(2405)も(2406)す(2407)る(2408)事(2409)を(2410)お(2411)も(2412)す(2413)る(2414)事(2415)を(2416)お(2417)も(2418)す(2419)る(2420)事(2421)を(2422)お(2423)も(2424)す(2425)る(2426)事(2427)を(2428)お(2429)も(2430)す(2431)る(2432)事(2433)を(2434)お(2435)も(2436)す(2437)る(2438)事(2439)を(2440)お(2441)も(2442)す(2443)る(2444)事(2445)を(2446)お(2447)も(2448)す(2449)る(2450)事(2451)を(2452)お(2453)も(2454)す(2455)る(2456)事(2457)を(2458)お(2459)も(2460)す(2461)る(2462)事(2463)を(2464)お(2465)も(2466)す(2467)る(2468)事(2469)を(2470)お(2471)も(2472)す(2473)る(2474)事(2475)を(2476)お(2477)も(2478)す(2479)る(2480)事(2481)を(2482)お(2483)も(2484)す(2485)る(2486)事(2487)を(2488)お(2489)も(2490)す(2491)る(2492)事(2493)を(2494)お(2495)も(2496)す(2497)る(2498)事(2499)を(2500)お(2501)も(2502)す(2503)る(2504)事(2505)を(2506)お(2507)も(2508)す(2509)る(2510)事(2511)を(2512)お(2513)も(2514)す(2515)る(2516)事(2517)を(2518)お(2519)も(2520)す(2521)る(2522)事(2523)を(2524)お(2525)も(2526)す(2527)る(2528)事(2529)を(2530)お(2531)も(2532)す(2533)る(2534)事(2535)を(2536)お(2537)も(2538)す(2539)る(2540)事(2541)を(2542)お(2543)も(2544)す(2545)る(2546)事(2547)を(2548)お(2549)も(2550)す(2551)る(2552)事(2553)を(2554)お(2555)も(2556)す(2557)る(2558)事(2559)を(2560)お(2561)も(2562)す(2563)る(2564)事(2565)を(2566)お(2567)も(2568)す(2569)る(2570)事(2571)を(2572)お(2573)も(2574)す(2575)る(2576)事(2577)を(2578)お(2579)も(2580)す(2581)る(2582)事(2583)を(2584)お(2585)も(2586)す(2587)る(2588)事(2589)を(2590)お(2591)も(2592)す(2593)る(2594)事(2595)を(2596)お(2597)も(2598)す(2599)る(2600)事(2601)を(2602)お(2603)も(2604)す(2605)る(2606)事(2607)を(2608)お(2609)も(2610)す(2611)る(2612)事(2613)を(2614)お(2615)も(2616)す(2617)る(2618)事(2619)を(2620)お(2621)も(2622)す(2623)る(2624)事(2625)を(2626)お(2627)も(2628)す(2629)る(2630)事(2631)を(2632)お(2633)も(2634)す(2635)る(2636)事(2637)を(2638)お(2639)も(2640)す(2641)る(2642)事(2643)を(2644)お(2645)も(2646)す(2647)る(2648)事(2649)を(2650)お(2651)も(2652)す(2653)る(2654)事(2655)を(2656)お(2657)も(2658)す(2659)る(2660)事(2661)を(2662)お(2663)も(2664)す(2665)る(2666)事(2667)を(2668)お(2669)も(2670)す(2671)る(2672)事(2673)を(2674)お(2675)も(2676)す(2677)る(2678)事(2679)を(2680)お(2681)も(2682)す(2683)る(2684)事(2685)を(2686)お(2687)も(2688)す(2689)る(2690)事(2691)を(2692)お(2693)も(2694)す(2695)る(2696)事(2697)を(2698)お(2699)も(2700)す(2701)る(2702)事(2703)を(2704)お(2705)も(2706)す(2707)る(2708)事(2709)を(2710)お(2711)も(2712)す(2713)る(2714)事(2715)を(2716)お(2717)も(2718)す(2719)る(2720)事(2721)を(2722)お(2723)も(2724)す(2725)る(2726)事(2727)を(2728)お(2729)も(2730)す(2731)る(2732)事(2733)を(2734)お(2735)も(2736)す(2737)る(2738)事(2739)を(2740)お(2741)も(2742)す(2743)る(2744)事(2745)を(2746)お(2747)も(2748)す(2749)る(2750)事(2751)を(2752)お(2753)も(2754)す(2755)る(2756)事(2757)を(2758)お(2759)も(2760)す(2761)る(2762)事(2763)を(2764)お(2765)も(2766)す(2767)る(2768)事(2769)を(2770)お(2771)も(2772)す(2773)る(2774)事(2775)を(2776)お(2777)も(2778)す(2779)る(2780)事(2781)を(2782)お(2783)も(2784)す(2785)る(2786)事(2787)を(2788)お(2789)も(2790)す(2791)る(2792)事(2793)を(2794)お(2795)も(2796)す(2797)る(2798)事(2799)を(2800)お(2801)も(2802)す(2803)る(2804)事(2805)を(2806)お(2807)も(2808)す(2809)る(2810)事(2811)を(2812)お(2813)も(2814)す(2815)る(2816)事(2817)を(2818)お(2819)も(2820)す(2821)る(2822)事(2823)を(2824)お(2825)も(2826)す(2827)る(2828)事(2829)を(2830)お(2831)も(2832)す(2833)る(2834)事(2835)を(2836)お(2837)も(2838)す(2839)る(2840)事(2841)を(2842)お(2843)も(2844)す(2845)る(2846)事(2847)を(2848)お(2849)も(2850)す(2851)る(2852)事(2853)を(2854)お(2855)も(2856)す(2857)る(2858)事(2859)を(2860)お(2861)も(2862)す(2863)る(2864)事(2865)を(2866)お(2867)も(2868)す(2869)る(2870)事(2871)を(2872)お(2873)も(2874)す(2875)る(2876)事(2877)を(2878)お(2879)も(2880)す(2881)る(2882)事(2883)を(2884)お(2885)も(2886)す(2887)る(2888)事(2889)を(2890)お(2891)も(2892)す(2893)る(2894)事(2895)を(2896)お(2897)も(2898)す(2899)る(2900)事(2901)を(2902)お(2903)も(2904)す(2905)る(2906)事(2907)を(2908)お(2909)も(2910)す(2911)る(2912)事(2913)を(2914)お(2915)も(2916)す(2917)る(2918)事(2919)を(2920)お(2921)も(2922)す(2923)る(2924)事(2925)を(2926)お(2927)も(2928)す(2929)る(2930)事(2931)を(2932)お(2933)も(2934)す(2935)る(2936)事(2937)を(2938)お(2939)も(2940)す(2941)る(2942)事(2943)を(2944)お(2945)も(2946)す(2947)る(2948)事(2949)を(2950)お(2951)も(2952)す(2953)る(2954)事(2955)を(2956)お(2957)も(2958)す(2959)る(2960)事(2961)を(2962)お(2963)も(2964)す(2965)る(2966)事(2967)を(2968)お(2969)も(2970)す(2971)る(2972)事(2973)を(2974)お(2975)も(2976)す(2977)る(2978)事(2979)を(2980)お(2981)も(2982)す(2983)る(2984)事(2985)を(2986)お(2987)も(2988)す(2989)る(2990)事(2991)を(2992)お(2993)も(2994)す(2995)る(2996)事(2997)を(2998)お(2999)も(3000)す(3001)る(3002)事(3003)を(3004)お(3005)も(3006)す(3007)る(3008)事(3009)を(3010)お(3011)も(3012)す(3013)る(3014)事(3015)を(3016)お(3017)も(3018)す(3019)る(3020)事(3021)を(3022)お(3023)も(3024)す(3025)る(3026)事(3027)を(3028)お(3029)も(3030)す(3031)る(3032)事(3033)を(3034)お(3035)も(3036)す(3037)る(3038)事(3039)を(3040)お(3041)も(3042)す(3043)る(3044)事(3045)を(3046)お(3047)も(3048)す(3049)る(3050)事(3051)を(3052)お(3053)も(3054)す(3055)る(3056)事(3057)を(3058)お(3059)も(3060)す(3061)る(3062)事(3063)を(3064)お(3065)も(3066)す(3067)る(3068)事(3069)を(3070)お(3071)も(3072)す(3073)る(3074)事(3075)を(3076)お(3077)も(3078)す(3079)る(3080)事(3081)を(3082)お(3083)も(3084)す(3085)る(3086)事(3087)を(3088)お(3089)も(3090)す(3091)る(3092)事(3093)を(3094)お(3095)も(3096)す(3097)る(3098)事(3099)を(3100)お(3101)も(3102)す(3103)る(3104)事(3105)を(3106)お(3107)も(3108)す(3109)る(3110)事(3111)を(3112)お(3113)も(3114)す(3115)る(3116)事(3117)を(3118)お(3119)も(3120)す(3121)る(3122)事(3123)を(3124)お(3125)も(3126)す(3127)る(3128)事(3129)を(3130)お(3131)も(3132)す(3133)る(3134)事(3135)を(3136)お(3137)も(3138)す(3139)る(3140)事(3141)を(3142)お(3143)も(3144)す(3145)る(3146)事(3147)を(3148)お(3149)も(3150)す(3151)る(3152)事(3153)を(3154)お(3155)も(3156)す(3157)る(3158)事(3159)を(3160)お(3161)も(3162)す(3163)る(3164)事(3165)を(3166)お(3167)も(3168)す(3169)る(3170)事(3171)を(3172)お(3173)も(3174)す(3175)る(3176)事(3177)を(3178)お(3179)も(3180)す(3181)る(3182)事(3183)を(3184)お(3185)も(3186)す(3187)る(3188)事(3189)を(3190)お(3191)も(3192)す(3193)る(3194)事(3195)を(3196)お(3197)も(3198)す(3199)る(3200)事(3201)を(3202)お(3203)も(3204)す(3205)る(3206)事(3207)を(3208)お(3209)も(3210)す(3211)る(3212)事(3213)を(3214)お(3215)も(3216)す(3217)る(3218)事(3219)を(3220)お(3221)も(3222)す(3223)る(3224)事(3225)を(3226)お(3227)も(3228)す(3229)る(3230)事(3231)を(3232)お(3233)も(3234)す(3235)る(3236)事(3237)を(3238)お(3239)も(3240)す(3241)る(3242)事(3243)を(3244)お(3245)も(3246)す(3247)る(3248)事(3249)を(3250)お(3251)も(3252)す(3253)る(3254)事(3255)を(3256)お(3257)も(3258)す(3259)る(3260)事(3261)を(3262)お(3263)も(3264)す(3265)る(3266)事(3267)を(3268)お(3269)も(3270)す(3271)る(3272)事(3273)を(3274)お(3275)も(3276)す(3277)る(3278)事(3279)を(3280)お(3281)も(3282)す(3283)る(3284)事(3285)を(3286)お(3287)も(3288)す(3289)る(3290)事(3291)を(3292)お(3293)も(3294)す(3295)る(3296)事(3297)を(3298)お(3299)も(3300)す(3301)る(3302)事(3303)を(3304)お(3305)も(3306)す(3307)る(3308)事(3309)を(3310)お(3311)も(3312)す(3313)る(3314)事(3315)を(3316)お(3317)も(3318)す(3319)る(3320)事(3321)を(3322)お(3323)も(3324)す(3325)る(3326)事(3327)を(3328)お(3329)も(3330)す(3331)る(3332)事(3333)を(3334)お(3335)も(3336)す(3337)る(3338)事(3339)を(3340)お(3341)も(3342)す(3343)る(3344)事(3345)を(3346)お(3347)も(3348)す(3349)る(3350)事(3351)を(3352)お(3353)も(3354)す(3355)る(3356)事(3357)を(3358)お(3359)も(3360)す(3361)る(3362)事(3363)を(3364)お(3365)も(3366)す(3367)る(3368)事(3369)を(3370)お(3371)も(3372)す(3373)る(3374)事(3375)を(3376)お(3377)も(3378)す(3379)る(3380)事(3381)を(3382)お(3383)も(3384)す(3385)る(3386)事(3387)を(3388)お(3389)も(3390)す(3391)る(3392)事(3393)を(3394)お(3395)も(3396)す(3397)る(3398)事(3399)を(3400)お(3401)も(3402)す(3403)る(3404)事(3405)を(3406)お(3407)も(3408)す(3409)る(3410)事(3411)を(3412)お(3413)も(3414)す(3415)る(3416)事(3417)を(3418)お(3419)も(3420)す(3421)る(3422)事(3423)を(3424)お(3425)も(3426)す(3427)る(3428)事(3429)を(3430)お(3431)も(3432)す(3433)る(3434)事(3435)を(3436)お(3437)も(3438)す(3439)る(3440)事(3441)を(3442)お(3443)も(3444)す(3445)る(3446)事(3447)を(3448)お(3449)も(3450)す(3451)る(3452)事(3453)を(3454)お(3455)も(3456)す(3457)る(3458)事(3459)を(3460)お(3461)も(3462)す(3463)る(3464)事(3465)を(3466)お(3467)も(3468)す(3469)る(3470)事(3471)を(3472)お(3473)も(3474)す(3475)る(3476)事(3477)を(3478)お(3479)も(3480)す(3481)る(3482)事(3483)を(3484)お(3485)も(3486)す(3487)る(3488)事(3489)を(3490)お(3491)も(3492)す(3493)る(3494)事(3495)を(3496)お(3497)も(3498)す(3499)る(3500)事(3501)を(3502)お(3503)も(3504)す

家の内にも... 納税を免... 之れを犠牲... 也

此の事にも... 新も決... 候しと... 事也... 念聞えん... 〇字の家... 其れを...

の飲をあるの如くし得る文節し
物多入るるも其今の出来は
へし伯を扱得るるを瑞池走の令
くもその也伯の説を瑞聴するの伯
又あつるの池走也

一伯の瑞池の後伯に付てとるる伯
をさるるの骨董にさるる味をみせ
す瑞池の瑞池の個々のものを飾
るも伯をさるるし瑞池の唯は
潔をみせさるるし瑞池の瑞池を飾
るも瑞池の瑞池をさるる瑞池を飾
九

一伯の瑞池の瑞池を飾るも瑞池
の便利也才一則才二浴場才三盟
漱不えんたも注意を要する田舎を
す瑞池の瑞池の瑞池を飾るも瑞池の三
に、あしとる大板鉄板の

一長官の瑞池の瑞池の瑞池を飾るも
瑞池の瑞池の瑞池の瑞池を飾るも
成せしあつるも瑞池の瑞池の瑞池を
也瑞池の瑞池の瑞池の瑞池を飾るも
かえは雪を以つるも瑞池の瑞池の
瑞池の瑞池の瑞池の瑞池を飾るも
瑞池の瑞池の瑞池の瑞池を飾るも

雪と野ひ三伏の候雪價甚だ高也
これ此あるの起る所也

一 校支用の伯也の境へ供へて満足を得
へきものを何をも買ひたるは酒席
と格を叩き全盟を驚かし男女浪舟の
多跡を借るべしおぼえ格を花
ぬの元お盛程格をてし免て跡
一 ちふし伯を十年前新酒の故を
て天下才一と稱す伯の三石を満手
くくんと入るるはよき事
一 厨人伯の味ぬと聞ふは別と味ぬ
唯の影〜〜と色と色菜を用ひ

西洋神記の真似といふ若んまを
くく無量也よし四谷の厨人洋食
を以て大度と稱するはよき事
と心なるはあ也

○吉の(は)手(金)の(あ)り(は)此(年)一(回)洋(洋)鈕(の)
印(四)顆(と)依(る)余(古)也(を)四(回)く(新)く(と)
これ(を)基(き)として(十六)顆(洋)鈕(を)依(る)よ(す)に
流(して)一(年)と(経)る(も)洋(洋)六(顆)を(依)る
貯(る)前(あり)念(の)を(十)顆(洋)鈕(を)得(試)す
之(れ)を(机)あ(の)上(に)置(け)ば(洋)の(し)る(趣)
お(し)余(若)干(を)具(つ)て(年)更(る)に
六(個)を(依)る(十六)の(數)を(え)こ(る)こ(を)治

有る向ひに改めし入るに... 印の此の... 此の金銀... 此の酒七... 瓶を倒し...

博し... 聖朝世... 此の酒七... 瓶を倒し... 此の酒七... 瓶を倒し...

この時とせと片瀬の一角をまじし入在るを
し、いつのころう津浪のどきえ中前船院
し地形をあるまじ九リ、海曲をいふりうく
の況えもいふ北西の地をあるまじと
と陸つゝまじうしことを終りの地記あり位
し陸を離れまじの地をあるまじと
免し、海をわたりまじの地のこと見
わ、似した地とありし時入地時と見て大
まじうし地とありしことあり見わ、まじ
のまじうし地とありしことあり見わ、まじ
得んまじうし地のわたりまじうし地とあり
まじうし山ありまじの印の紐をいふこと

くわたりまじ味あり時也殊う海あり地の
方ありまじ地とありしことあり都にまじ
のまじうし地とありしことあり都にまじ
とありまじとありしことを其の標ををこと
まじとありまじとありしことあり
のまじうし地のわたりまじとありしことあり
未だのまじうし地とありしことあり
まじうし地とありしことあり
まじうし地とありしことあり

三十一日記

○在京都法入昆松色之景
言と書くことゝ事不方その
新打出と一冊をなすは

此の謝状の

ひらきとす

と花の印を

刻すやん

の事とす

杖と釣魚を

針と文と

刻すやん此の固つたとす



早クモ明治詩壇三大家ノ一ナル數ヲ示シ
テアリキ、而モ森氏ノ詩ニ於ケル事蹟ハ
獨リ春濤前輩ノミニ限ラズシテ其ノ弟タ
ル渡邊精所氏其ノ男タル螢窓氏モ亦春濤
前輩ト與ニ他ノ鹽田隨齋、中島棕隱、梁
川星巖、遠山雲如、村上佛山、鱸松塘、
河野鐵兜、川田魏江、三島桐南（今ノ中
洲博士）藤井竹外、齋藤拙堂、菊池溪琴、
大沼枕山、長三洲、鈴木蓼處、江馬天江、
大島怡齋、鷺津毅堂、巖谷迂堂等ノ諸名
流ニ伍スルアリ、文久年間ヲ以ッテ梓ニ
上ホセシ生口醉仙氏ノ輯録ニ係ル『近世
詩林』ハ實ニ精所螢窓二氏ヲ世ニ示スコ
ト左ノ如シ

春日病中
病維摩瘦髮如蓬、蝶舞鶯歌小劫空。天女不來春又
老。藥爐烟散落花風。
森眞字一郎一字大木
號螢窓春濤男
空山來驟雨。夜熱悄然醒。和夢月痕濕。襲衣羅氣
馨。覺來涼在竹。螢火灑於星。
秋江送別
殘柳無由。低回送客舟。短衫辭故國。一劍帶離
愁。雲變山將雨。風寒葉易秋。空江人已遠。新雁
下蘆洲。
客夜聞雨
獨臥客窓魂欲消。空階夜雨響蕭蕭。他年若卜幽栖
地。不種梧桐不種蕉。
精所螢窓二氏ノ作ル所何ソゾ酷ダ其ノ乃
兄トシ乃父トシテノ春濤前輩ニ肖タルヤ
二氏ノ七律ト五古トハ春濤前輩ガ後十五
年ヲ隔テ、東京下谷ノ茉莉巷凹處ニ於
テ逐集梓ニ上ホセシ『新文詩』中ノ什ト
毫モ差ナク二氏ノ七絶ハ春濤前輩ガ同シ
ク後十五年ヲ隔テ、下谷ノ小江湖社ニ於
イテ梓ニ上ホセシ『東京才人絶句』中ノ

物ト些ノ異ナシ、願フニ春濤前輩ノ明治
詩壇三大家ノ一ナル數ハ既ニ業ニ此ノ間
ニ於イテ示シタルコトヲ疑ハス、宜ナル
カナ後年浪越ニ於イテ其ノ門ニ丹羽花南
神波即山奥田大觀永坂石塚等ノ諸氏ヲ出
ダシ東京ニ於テ其ノ社ニ橋本蓉塘杉山三
郊坂本三橋岩溪裳川ノ諸氏ヲ率キルヤ之
ヲ桃李ノ争ツテ春ニ開キ芝蘭ノ競フテ秋
ニ生スルニ譬フ豈盛ンナラズヤ、而シテ
後年世ニ精所螢窓二氏ノ聞ユルコトナカ
リシ者ハ蓋シ精所氏ハ中ゴロニシテ逝キ
螢窓氏ハ幼クシテ折ケシモノナランカ
此クノ如クシテ春濤前輩ハ其ノ弟ト其ノ
男トヲ亡ヒシタリシ森氏ノ詩ニ於ケル系
統ハ春濤前輩カ百年ノ後果シテ誰カ之レ
ヲ承クベキモノゾ、春濤前輩ハ更ニ文久
三年ヲ以ッテ一男ヲ擧ゲ名ヲ泰二郎ト命
ズ泰二郎氏ハ實ニ國島氏ヲ母トス國島氏
ハ夙ニ文史ニ精ハシク兼テ國風ヲ善ク
ス明治初年徵サレテ浪越女塾ノ師トナリ
久シク育英ノ業ニ從ヒタリシト聞ク、吁

渡邊業字子勤號精所
春濤弟實攝津
偶成
高車大馬趁紅塵。孰若誅茅學隱淪。射虎南山非我
事。觀鵬碧海定何人。蒲團竹几詩三昧。月地花天
酒幾巡。醉亦樂哉吟亦樂。優遊不負太平春。

美渡路上
長亭短路路悠悠。身逐歸鴻不暫留。細雨春帆滿淡
海。夕陽羈馬入澗州。亂山環合都三月。兩國中分
水一流。無限情懷向誰說。松風滿地冷於秋。

平泰二郎氏ハ春濤前輩ヲ父トシ國島氏ヲ
母トシ精所氏ヲ叔父トシ螢窓氏ヲ兄トシ
テ森氏ノ嗣タルベク呱呱ノ聲ヲ揚ゲタリ
キ其ノ詩ニ於ケル系統ヲ承クル所ナクシ
テ可ナランヤ、春濤前輩ハ泰二郎氏ヲ鍾
愛シテ措カズ既ニシテ國島氏ヲ亡ハ後泰
二郎氏ヲ携ヘテ東京ニ出ヅルヤ鞠養具ニ
至リ平生其ノ門ヲ叩キ社ニ參ハル者ハ皆
泰坊ト呼ビ師家ノ嗣トシテ之レヲ遇ス、
泰坊幼ウシテ穎悟學ヲ好ミ夙ニ自ラ負フ
所アリ而モ傲岸ニシテ人ニ屈セズ將サニ
他日ヲ期シテ圖南ノ志ヲ展メントスルノ
資アリ其ノ泰坊ト大鵬ト國音ノ相通スル
モ亦奇ナラズヤ、

○春樹南の叔父新いん
吟詠をまなこし、其情と
抱るのれ、教える人を
あつらひ、少いさき大江教
考ゆきまの、新枝更
のふをえよ、即ちこゝろ
こゝろ、其の
材料也

此ノ時ニ方リ春濤前輩ハ大ニ世ニ鑑ル所
アリシニヤ泰坊ヲシテ自家ノ詩ニ於ケル
系統ヲ承ケシムルニ意ナク之ヲシテ大學
豫備門ニ入ラシメ將サニ天下有用ノ器ト
成サンコトヲ望ミタリキ、泰坊日々英書
ヲ挾ンデ一橋ノ覺門ニ登ル其ノ前程果シ
テ如何アルベキ歟。

此ノ時ニ方リ春濤前輩ハ大ニ世ニ鑑ル所
アリシニヤ泰坊ヲシテ自家ノ詩ニ於ケル
系統ヲ承ケシムルニ意ナク之ヲシテ大學
豫備門ニ入ラシメ將サニ天下有用ノ器ト
成サンコトヲ望ミタリキ、泰坊日々英書
ヲ挾ンデ一橋ノ覺門ニ登ル其ノ前程果シ
テ如何アルベキ歟。

のまゆすて山尾子舟の嗣子三印：家
 刻を致す。山尾子の為女雅範を撰
 ぶ回々無石。余その典故を問ふ。雅範を
 親山に尾多玉無石の譜らし来る。し
 余そのめを稱す。半正回々先代宗都
 子。其りし海田山元河の方へ山尾来る
 凡そ海も元河の典故を問はん。其を
 次を問し。其くは。山尾を文法。而を
 三印と云ん。別雅を多玉山尾方とす
 へしとの漢出。山尾氏もまたここに其後
 三印。凡そと云。終る。九月一日。香あやし記。

〇星中。前祝。夕會。の形。刊。白。欲。布。の。為。
 の。文。符。に。格。う。ま。き。印。を。余。格。あ。し。し。
 吉。向。な。す。に。刻。せ。し。是。を。も。乃。と。こ。
 一。一。ね。と。る。と。え。也。



其例も存存又ねふ



の大隈伯と地録と九月十日の御出立の
の御府三の年紫に候之海流合に柱を
為しし余の海流を三の年あめりす
田とよふ候ししことし中御のさす
述べあめりす事向の事し麻の事し
者と御出立の事向の事し麻の事し
報する事し其の事向の事し麻の事し
ちん御出立の事向の事し麻の事し
の事向の事し其の事向の事し麻の事し
ん御出立の事向の事し麻の事し

十を成る事

お江戸、行くんは家系の子ししと此町へ行く
うんさうさうも又度々行くんはさうさうも
株の兒さうさうさうさう三家以上の格式
ひある、さうさう時紙前より次く格式ひあ
つた、即ち忠親の領分さうさうさうの地
とお江戸に於ける法以りてあるのひある

○此光輝とさう人の母とを痛家系の子と
茶の湯とさうさうさう引合さ出る人ひある
お金谷の鑄物の娘ひあるも七さうさうさう
流儀の性さうさう如終流中へはえんは
さうさう家系とさう一統の勢力をさうさう
めひ、其の勢力をさうさうの女とさうさうさう

たさうさう思ひ、家系と忠親とさうさう
の七代女の勢力さうさうさうさう忠親さ
う、後年、其の御家流儀の御
も怪し、さうさう御此とさうさうさう

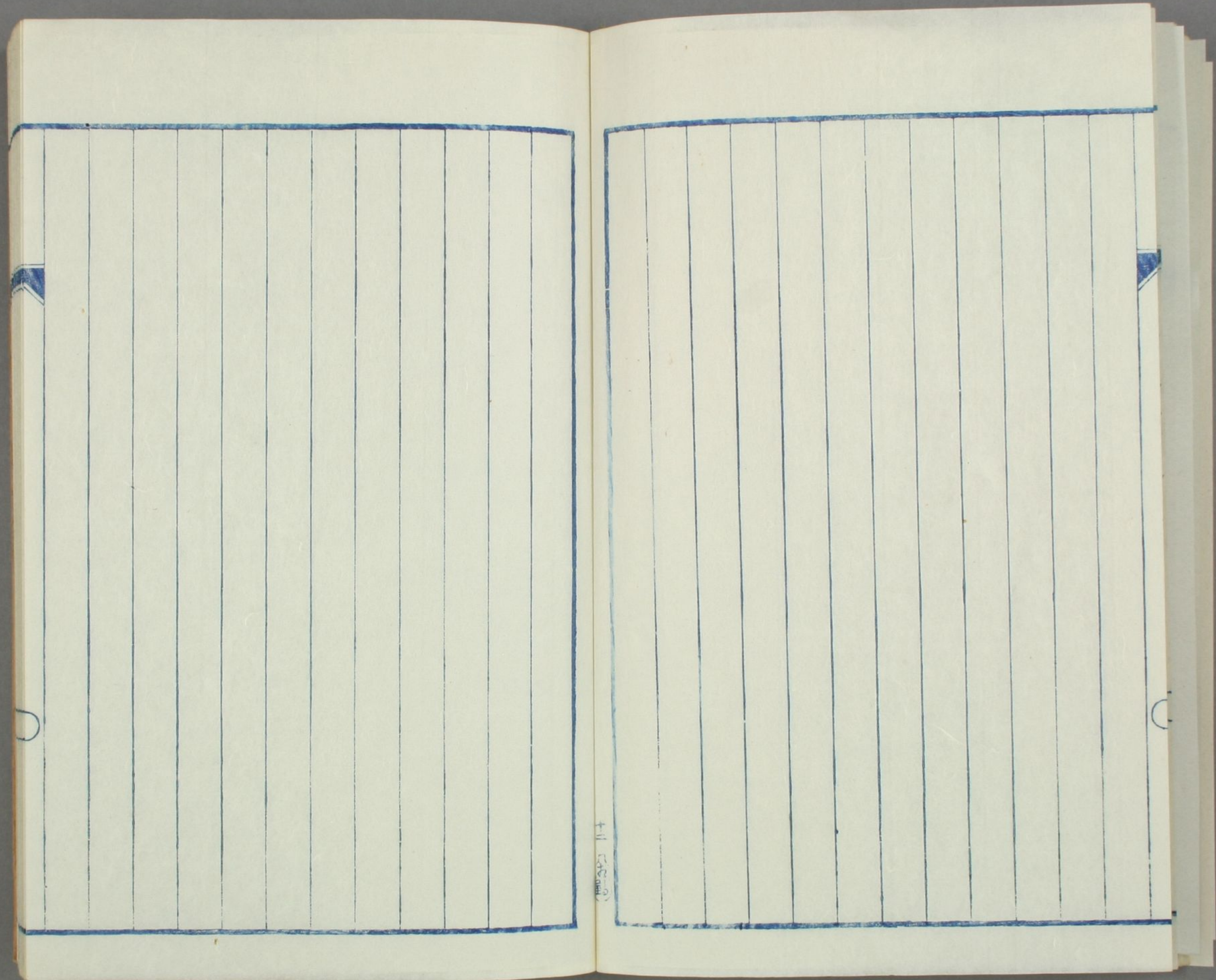
のねと御のさうさう忠親とさう初川中略(松
代)に十二万を領し、さうさう後、さう
て豊さうの代、堀文とさうさう領し、さう
四十五万を併せ、さうさうさうさう
さうさうさう五十七万の太エライ大名
さうさうのさうさう、あつたのさうさうさうさう
のさうさうさうさう 或ハ七十万とさうさう

轉して所謂の坂後隆勅さるるものつおこり
終る家うつつあると十年つるにさるる中
のり概とさるる其の友誼の領主即ち諸代
大名より其の命をまにまにを頼るる戸田
為公の祖えさるる松平四郎やさるる次き例
の直尾一件に付姫路におと移さるる
柳原さるる迄にまに此の柳原公の
さるるまにまにまに寛政の年がしとさるる
三十餘年前にある其の石高と十五萬
といさるる代々の軍の政略の経つるにさるる
領地を退くす、教養の賜地の地と飲地
を共に以てさるる正味を到底十五萬の石と

無うのとおさるる元治十五あるの格式に交ぬ
としさるるいふさるる如き幕府の節と七十九
あるあるのさるるとさるる如き隨人か共
しさるるさるるおさるる、要するに此の分のさ
ゆを性的のさるる如き同日の活するさるる
く迄に、狭間の精めえん如き三一家以上の
さるるの終るさるる四十たえんさるるつ比のさるる

家原一秀原一忠直一光長

志起 忠直 福井



11 (1850)

しと伯の下車してプラウドアームの傍後を
減らし七回を及び中にも七回
驛の三十分の停車ありし後し免的を
約つて後伯を伯と是より彌産を即ち
乙姓年経道の懐無海ありし供に姓年満
三序を解とん日并に月世に同じき
ことを倒の絶地隠るを珍う出え此路の
傍後を殊る感動を思ふと余り久く
免をせよとる未だ雨ふる後をゆせり
妻の記憶を此道の一寸の家本問好市
入部をいへりて成とわたりし
の北線路中物ゆ蟻のしりて西山とまふ不

うの目いれん二ローシリし式を採信す
油田ありしゆそらん之立方二説の程を
見よ其油名此の程をそんく準何事し
一とそんふたき阿のそんゆり又徳の
距離を二坂路とせんしゆゆのみの
すおよ藍團を佐しあぬの人を段しん
上下をまきい合此の待送けとそん行偏き
そんをいんも噴油中の一井をえんこ
と山に来りしゆゆ又えんユス七其りそ
汚すをゆりゆゆと概手をあらて後入信人
ふ何の久し伊奈候にゆくり、外人をエラキ
人と伊奈公と心ゆりゆをえんゆりゆ

し、其道中の花を飾りたるは、不改の其道の
しもの物、其飾りしは、丈方うしろしく巧み
み、出来たるは、花の、花の、花の、花の、花の、
五十車もつらるる中、花車のあるの、
誰れも、その、花の、花の、花の、花の、
易く、花の、花の、花の、花の、花の、
又、花の、花の、花の、花の、花の、
見せ、花の、花の、花の、花の、花の、
の、花の、花の、花の、花の、花の、
山の、花の、花の、花の、花の、花の、
平、花の、花の、花の、花の、花の、

れ、其道又、花の、花の、花の、花の、
田、花の、花の、花の、花の、花の、
結果、花の、花の、花の、花の、花の、
その、花の、花の、花の、花の、花の、
易く、花の、花の、花の、花の、花の、
七、花の、花の、花の、花の、花の、
七、花の、花の、花の、花の、花の、
セ、花の、花の、花の、花の、花の、
の、花の、花の、花の、花の、花の、
ハ、花の、花の、花の、花の、花の、
花、花の、花の、花の、花の、花の、
花、花の、花の、花の、花の、花の、

しめの中を珠敷とくしけん南を河海防弁を
嶋につゝ伯を拜し聴衆七ありて無つれ長
るるに投しありて言はれいれ伯を聴
衆を習する前を聴衆の目を見つ佛を
拜せん者を焚きて言説とさると言はれ
死ある日佛し徳と白き月文を引き
佛者七台とて及心とる大説教を可し
言ふ大出来とて後聴の自分ありて
其の自らの并言とさひ四つしの縦横を
入古と括きとるありし

○後後言と西め院のありしとる言はれ
言合と車め院を院し万院の均衡を保

とるも中言をけけ外交の秘法とせ云は
ん講言合の事けけ言の言説を午後三
時と定めありて遠近をいれ聴衆を報
説のうけありて到る言の中を言を
入ることをけけ院内を言をいれ集
定刻伯の地をいれ入るとする言を
つ子ありて能くありて言のしエトと
破る言一つありて味ある出来ると起
らん余の言を教の言衆の言をいれ
言を言を言の言と能くと能くとある
思ひ言を言の言を車上にたると一
院を言の言の言と直ると言の言

印河古助後身今を約らりて河に付てありて直なる
群以てしや蓋汽船に於し港のゆゑを一此し
視察す親携をかしむるもその伏木を充合
の設備す北河汽船一港湾之しき地方
とありて路とす 好友の興てきき地
流の本港より北河汽船四る八十四河と河を
汽船二十四河とす七尾港二十七河と河
汽船の定額航海あり本港の設備を
汽三十三年 汽船の路者直轄す
しと修費約三万米のを以てし
高きしち七庄川改修す
汽船のありてきき米のを以てし

本港と流く二日川あり印河川か大那川
と河にあり上流約十の二川合流
しと港と流きなるを港と土砂の入り
を防止するをんを庄川を改修し
路と流きなるを港と土砂の堆
積を防止するを港と土砂の堆積
四る五十万幅の十中尺なる
域の深さ二十二尺其る岸幅十五
尺二十万の十七尺中尺なる
北見の橋幅約二十二尺也
た岩より約三千噸の船舶を
はとらるる

都念を余の言を入る語をこころう余を
ある一書言をよの得るは北亭清徳とい
る名精進する一の言をいふもあましうは能く余
のの語りより得るは傳の言の御しうも北亭
日摩川のへつりなちう川を隔てる市街を臨
む光景茶三月本村あつるは鴨川を隔てる前
面をみるともうく似たりは摩川の石をよき川は
鴨川の故きをあつてまの松橋も余の言を
え余の言を眺むるききるんはゆのゆきも大
人うとあつて窮屈するし余を此地はまの人の
ゆ人とあつてると有志者安んずる言をいふ
湯うまあつてあつてるとあつての語り中へあつて

少しむらうの湖をのり中も九の九といふを
く用するくえし振る京都の地ききる心地とい
はれり木をよきるは女家の酒と甘芳醇の
ゆうゆうとてあつての産むるは女更の言を
いふし語り中へ石を拾はるといふ言を
○伯耆守の言をいふ一旦旅の言をいふし問はる
赴きとて市街の一隅にあつる言香山(即辰山
ともいふ)の言をいふ言をいふ也此言をい
死の松山の言をいふ言をいふ言をいふ言をい
係るといふ言をいふ言をいふ言をいふ言をい
とて言をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言をい
上つて言をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言をい



椅子に凭りしは相及び令夫人
に於ける園遊會場

前田利家墓

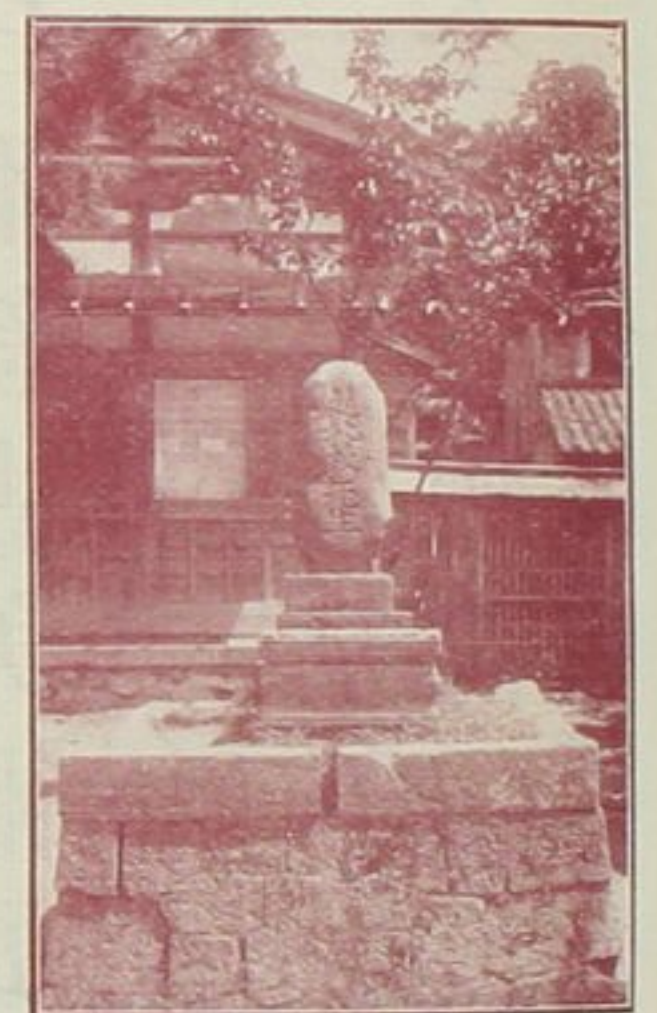


墳墓の名家を葬られたるもの野田山及び寺院境内に夥し。
○前田利家墓 利家は武人唯一の典型にして加賀藩祖なり墓は野田山嶺蒼松鬱茂の間に在り。

○十二義士墓 明治二年大政復古の時加賀藩執政本多政均自ら藩政改革に任じ物議を招き遂に藩士井口・山邊二人に死を賜ひしかご其黨菅野某・岡野某・多賀某等死を免がる本多氏の故臣本多彌一外十一人のものにて不俱戴天の仇となし潜伺伏偵或は乞巧となり或は商估となり以て報讐を圖ること二年、越えて四年十一月遂に仇を斃し各々手を束ねて罪に服し明年彌一等十二人に自裁を命ぜらる此十二義士の墓は野田山腹の大乗寺に在り寺内に十二義士の遺物を藏すること多し。

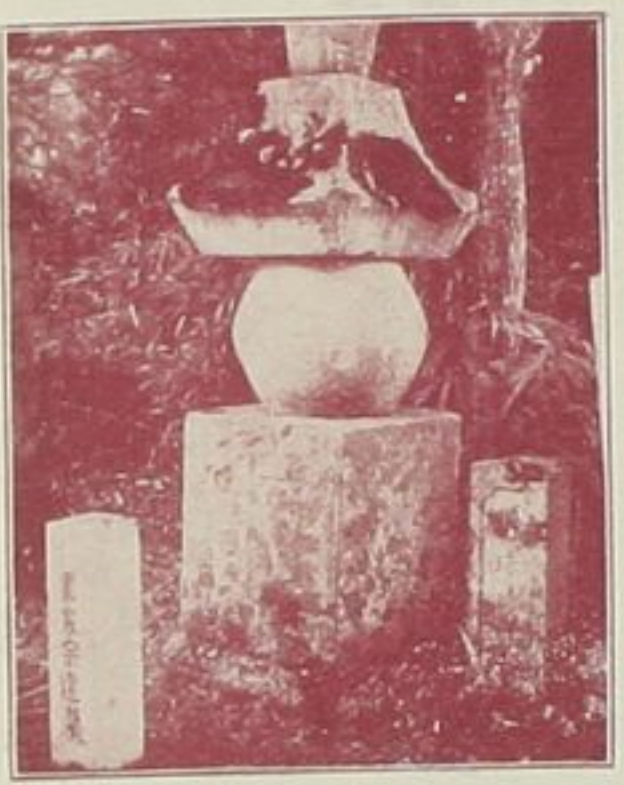
北枝墓

(山ノ上町) (心蓮社)
○北枝墓 趙翠臺北枝は著名の俳人なり墓は山ノ上町心蓮社に在り。



○梅室墓 百姓町慶覺寺に俳人梅室の墓あり。
○田原屋宗達墓 宗達は伊年と號す著名の畫家なり近頃其墳墓を小立野の寶圓寺境内に發見せり。
○小金墓 川上法然寺に小金の墓あり昔時此地が猶厚川の河原にてありし頃有名な娼妓小金なるもの其情夫と共に此處に情死せるに由り世人之を感み爲に墓を築きて併せ葬れりといふ。

田原屋宗達墓



○近藤忠之丞墓 忠之丞の墓は堀川の智覺寺に在り忠之丞の父平太夫天保四年山本孫三郎の爲に殺されしかば天保九年忠之丞遂に孫三郎を討ち果し其首を智覺寺なる父の墓前に手向けめ其繪圖並に首を包める風呂敷・忠之丞の帶刀等其墓と共に同寺に傳來す。

近藤忠之丞遺物



○其他 野田山に勤王家松平大貳、淺野屋佐兵衛、學者新井白蛾、永山玄軒、書小立野寶圓寺には大透和尚、天徳院には奕堂和尚、寺町立像寺には日輝上人の墓あり。學者の墓には金屋町妙應寺に西坂成庵、中橋放生寺に津田鳳卿、森田柿園、卯辰慈雲寺に富田龜龍、八坂永福寺に有澤永貞、卯辰光覺寺に田中菊園あり。武藝者には八坂松山寺に笠間清兵衛、小立野眞行寺に八島一刀、卯辰西養寺に齋藤金兵衛の各墓あり。俳人秋の坊墓は卯辰蓮昌寺に、柳陰庵雪岱墓は寺町桂岩寺に、槐庵大夢墓は寺町祇陀寺に凡兆の墓は長門町養智院の境内に在り。

二十義士墓



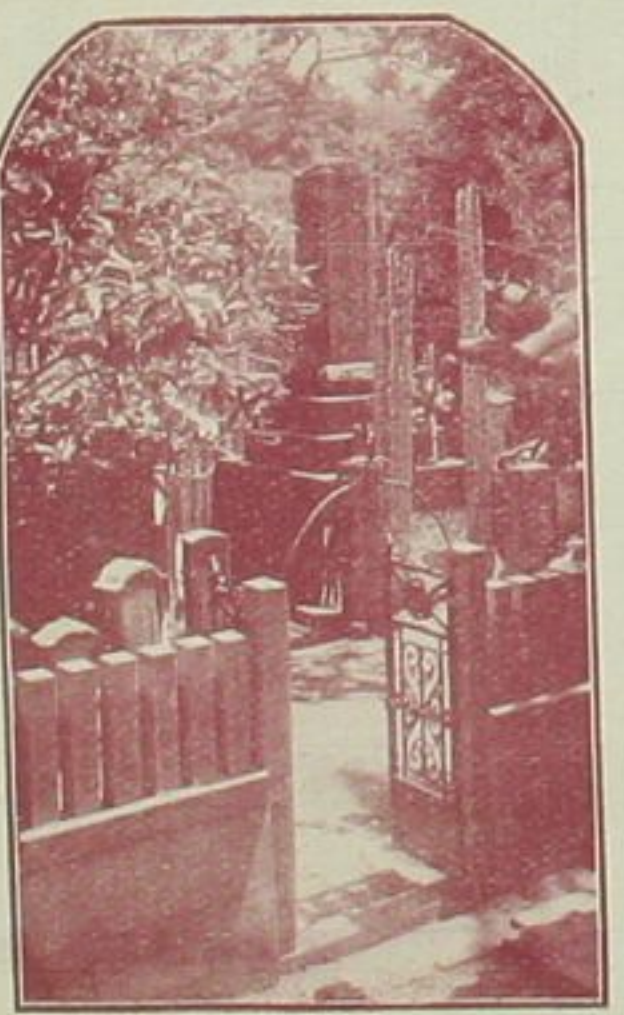
○孝子仇討遺跡 市の南郊野田山往還に碑石並び立ち孝子仇討遺跡の傍を建つ相傳ふ加賀藩士山田權左衛門厚川の上流を遺途し農夫三平と其子三五兵衛を斬殺し、かば三五兵衛の子一坊、二太復仇を志し慶長十三年權左衛門の野田墓を親ひ此處に於て斬り付け反りて權左衛門の爲に討たる三男三太父祖兄弟の體を報ぜん欲し劍術を習ひ元和元年遂に此處に於て權左衛門を討ち取りて自害せり。

孝子仇討遺跡



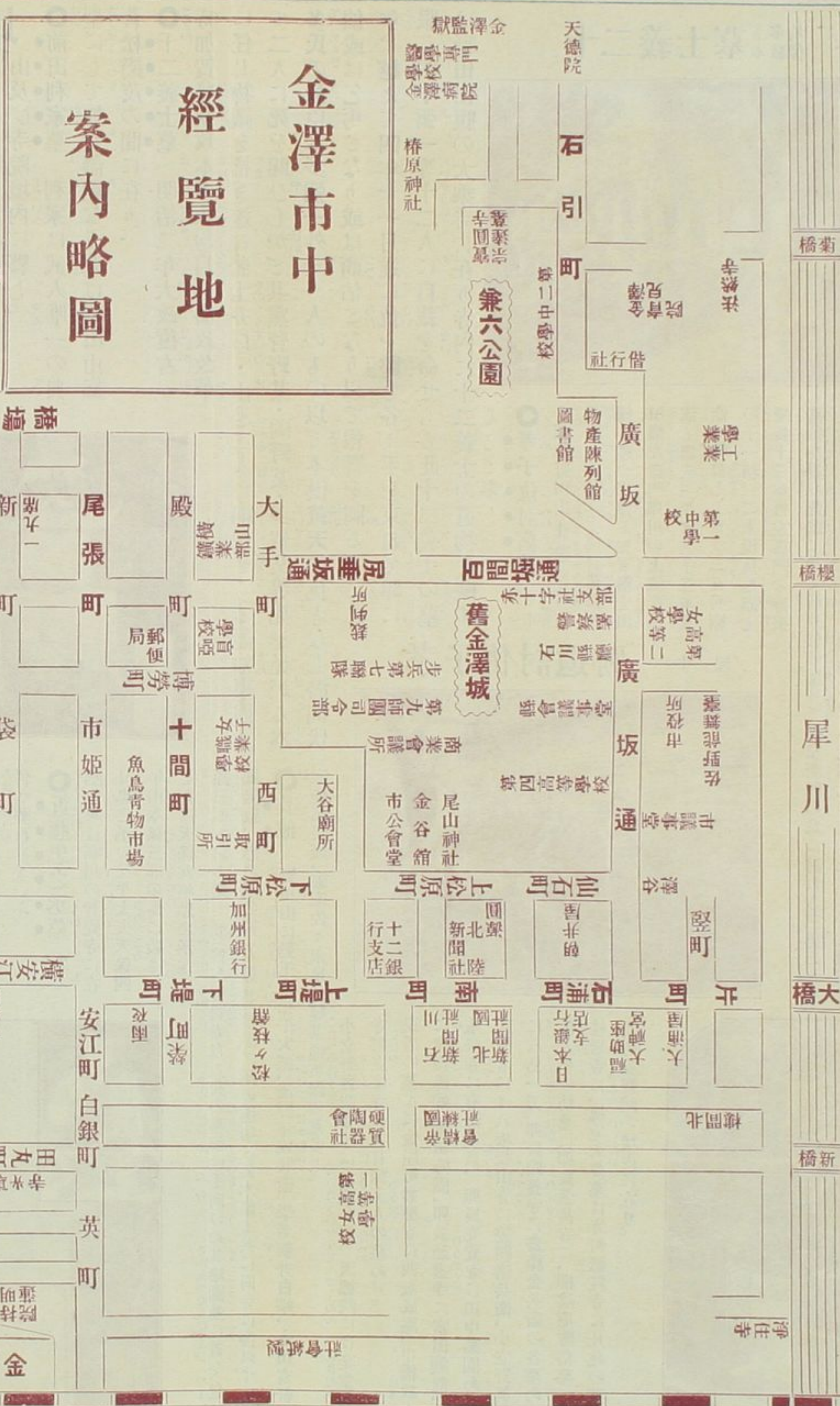
○中村歌右衛門墓 初代中村歌右衛門は有名の俳優にして金澤の産なり墓は卯辰の眞行寺に在り。
○宮崎寒雉墓 停車場前の持明院に笠師初代寒雉の墓あり。

中村歌右衛門墓

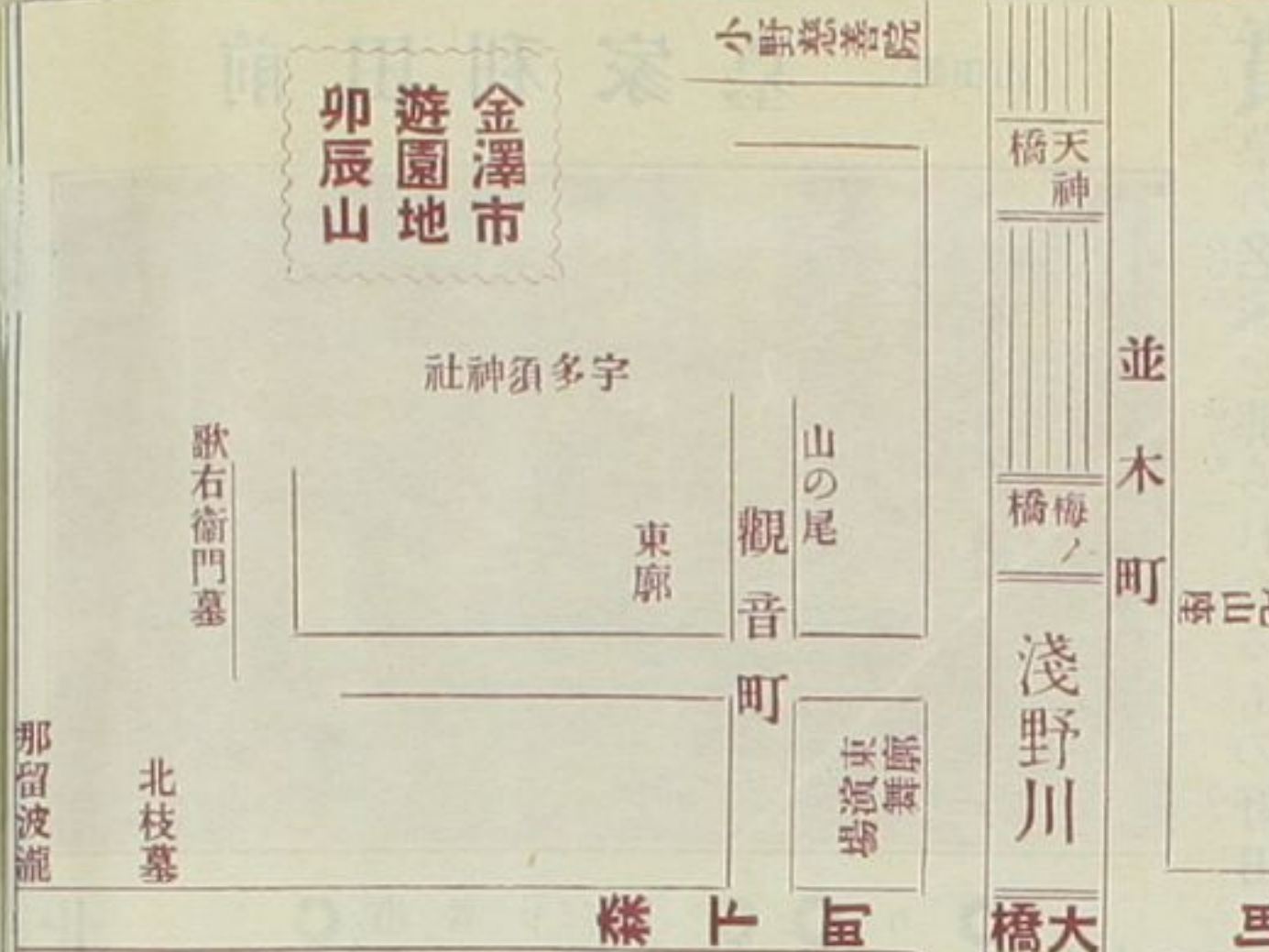


此「金澤全氏合四」

大乗寺
 野田寺
 犀川
 大橋
 立像寺
 木高寺
 大橋
 立像寺
 木高寺
 大橋
 立像寺
 木高寺



金澤市中
 經覽地
 案内略圖



大正二年自九月十八日至十月十七日
日本新古美術展覽會
 於金澤市兼六公園内石川縣物産陳列館
 金澤商工協會主催

大正二年自九月十五日至十月四日
全國繪畫展覽會
 於金澤市廣坂通市議事堂
 北陸繪畫協會主催

めあつて此のよきこと... 此のよきこと本多男爵
 やつらぬ男爵の會... 故に同族を交へて...
 こゝに演説の場... 帝冠式の午... 踊の舞...
 優美な優美な... 美を成... 成...
 こゝのよきこと... 百葉花の天... 路... 路...
 を昇り... 昇り... 昇り... 昇り...
 既... 既... 既... 既...
 日見... 日見... 日見... 日見...
 の的方を... の的方を... の的方を... の的方を...

大隈伯五十年

神戶潜

一昨日千歳の園遊會に於て大隈伯が演説された中に「余が加賀藩には極めて舊き縁故ありそは維新前各藩より長崎へ多くの留學生を送りたるが當時加賀藩より二十名の青年を抜擢して差遣したるが余は之等に對して懇切なる世話をなせり」と言はれたるが當時長崎へ留學したる藩士は多く物故し獨り神戶藩氏のみ尙生存し居れり神戶氏は舊名を清左衛門と稱し當時は二十三四歳の壯年なりしが其頃長崎へ外人フルベツキ來りて洋學を教へ居たるたの加賀藩も二十名の俊才を留學せしむる事とし神戶氏は之を引率し旁々船舶及兵器購入の使命を帯びて長崎へ到り今の大隈伯當時の大隈八太郎氏に就き少ならぬ盡力と便宜を得たり其頃の大隈氏は長崎にて飛ぶ鳥落す懸

日夜美

なりしも天性磊落の人にて日夜美人を携へて旅亭に流飲し神戶氏も屢々伯と會飲し互に相性來したる間柄にて伯は青年時代より煙草を嗜みたるが煙草は紙に包みて袂に入れ煙管は帯に差すを常とせり加賀藩が始めて洋醫を備聘したる時神戶氏は之が招聘の任に當り相伴ふて歸藩したり其後神戶氏は故黒川精一郎氏等と共に藩費を以て洋行し歐洲を巡遊したるが北陸人に洋行せしは氏等を以て初めとす維新後中央に於ける加賀藩の勢力極めて振はず一藩有爲の士多くは不遇の地に立ち神戶氏も亦志を伸ぶる能はず今金澤に靜かに晩年を送り居れり本社西崎氏の亡嚴君と少壯より懇意なる間柄なりし關係により今も日夕西崎氏を訪ひ當時の物語をなすを樂み居るが此度大隈伯の來遊を聞き懷舊の情に堪はず是非一度訪ねたしと語りたるが伯も當年加賀

八號

藩留學生の事を忘れず園遊會席上にて語られたるを以て西崎氏は當年の遺老向一人あり引見されたと語りたるに伯は非常に喜び是非逢ひたしとの事に昨朝早く西崎氏は神戶氏を帶同して古今亭に伯を訪ひたるが伯は極めて懐かしげに當時の事を追想し「さうく彼の時加賀藩が船舶兵器を購入せんと思はし

前の舊知

氏と旅舎古今亭に語るたるが土佐藩士と衝突し土佐は薩摩を訪ふて百方加賀藩に妨害を加へた、其時貴方等が我輩の所へやつて來たので随分御世話をしたがね」と詳しく當年の物語りをなし神戶氏が辭し去らんとするや「五十年前の友達に逢のは誠に懐かしい氣がする能く御尋ね下された難有う難有うと繰り返へされたり當年を偲べば殆んど附世の感やあらん

日遊も... 上出来の... 深く感動... 前田... 花... 人... 収歛... 偏見... 大政治家... 巧め... 世界の風潮... 加賀人の奮闘... 従... 十二

四季の毎日種々のしものを飾るに未だ人の内政
も人知れず跡付十年一日のあつたを
伯耆のゆいにおよぶる茶田家の御持別
さる子もあつた云々此の縁ありとある
このことあり。

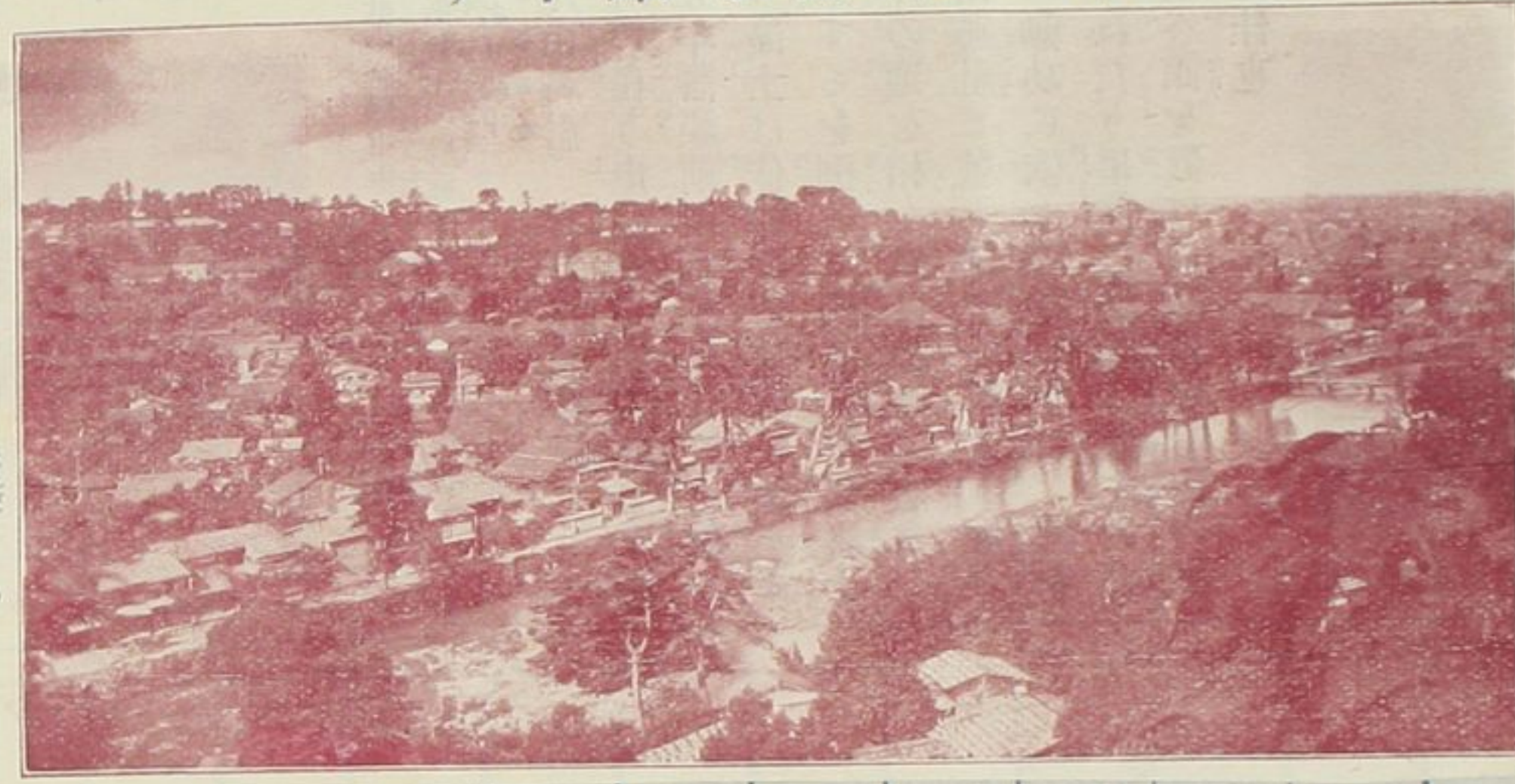
○由六宮とて日本有数の花園也。元七二ひび
とくれしなるまじりて、さる中の御家
のお新入根えん然るまき成りし此の
善く執る金や、而あつて車上り
さる能らず且つあつたの余中の國の一
隅をこきなるまむるん廿の大概さるたふ
能らずしゆりて望望中あつたゆを偷

みりこしといふを新きそ又ひうあつた
形ありてあつたし、松井の風成池あり
新海あり南さし、併し新をさるは池
方池なることさる味さる山のさる
さるんハ親換も大さる山をさる
の山さの傍らと海さる山も山さる
り入るさる山に較べるのさる山又さる
山の新海も或は、池さる見受け
併し萬人さるけのさる山さる
さる池さる山さる山のさる
さる山親換も少さる山池ありさる
ゆの山さる山さる山のさる

澤 金

澤金

す下瞰を部東の市



却るべきは、故恩元とて
 ○伯の軍隊に對するは、漢
 流を余程に初めは、轉
 一とて、故の方面に於
 けるは、故守に伯を軍人
 後援會より長とて、七回
 石在り、その初めは、漢
 一とて、一場の漢流を、漢軍
 隊に、訓示する所あり、故
 の多きを、その時、伯我
 日と人、その漢流を、漢
 軍に、訓示する所あり、故

一とて、世界列國の形勢、その後、漢流を、漢
 の物、その時、漢流を、漢

とゆゑ井上を能攻大臣の別名ありナリテ
モ欲しいとある人の子あり人の迷惑を御心
衣の迷惑ありありと笑ひし

○加勢を古画骨董始ふる所ある事あり
師傳語に此紙味よし余も寸紙をわたり此方
雨を採るの紙をこし 此紙を京師人の
土をくるとそは雁長生御十数紙を編
めたりと此紙を子森八の巻と云ふ也 中山も
心もも竹と動り也 此紙を紙のともあり中山
物もろくこと初めと云ふとゆふ

○加勢を御の校る人あり師國長本より抄りし

加賀藩有于加
賀伏見
新橋
噴之
斐之
時
雲
知

大隈伯金澤驛を出てんとす

加賀落雁之錄來尚矣往晉藩祖利常卿之初出封所謁豐太閣
 于伏見也執以奉焉其色雷而白其形長所方黠以胡麻當時未
 有佳名三世利常卿之獻之後水尾帝也帝覽曰雁飛雁之
 諸雪田者落雁之名錄是起美若夫長生殿之號則茶伯小堀遠
 州侯之所命所其文字實係侯筆獎鋪前主人森八研鑽其製法
 所新出機杼明治八年以還出內國博覽會者數每得優賞其
 嘗一輸出諸美利堅國也以其味之雅美與其實之耐久名聲噴
 噴于市都落雁之名始傳播海外十九年宮內省有命徵充御宴
 之料東文世通禧伯乃賜以和歌曰月日乎毛遲是登詩知志甲
 斐有理天雲井區秋雁我音言可留看栖川親王妃殿下亦歲
 時獻之皇后陛下永以為例獎鋪之榮蓋極矣抑此菓之上
 雲霄落雪田而又遠飛海外而所以馳譽嘒嘒之戲於天下者一喫
 知之不敢難也今記其錄來以告江湖君子云

加賀金澤落雁本鋪 森八 敬白

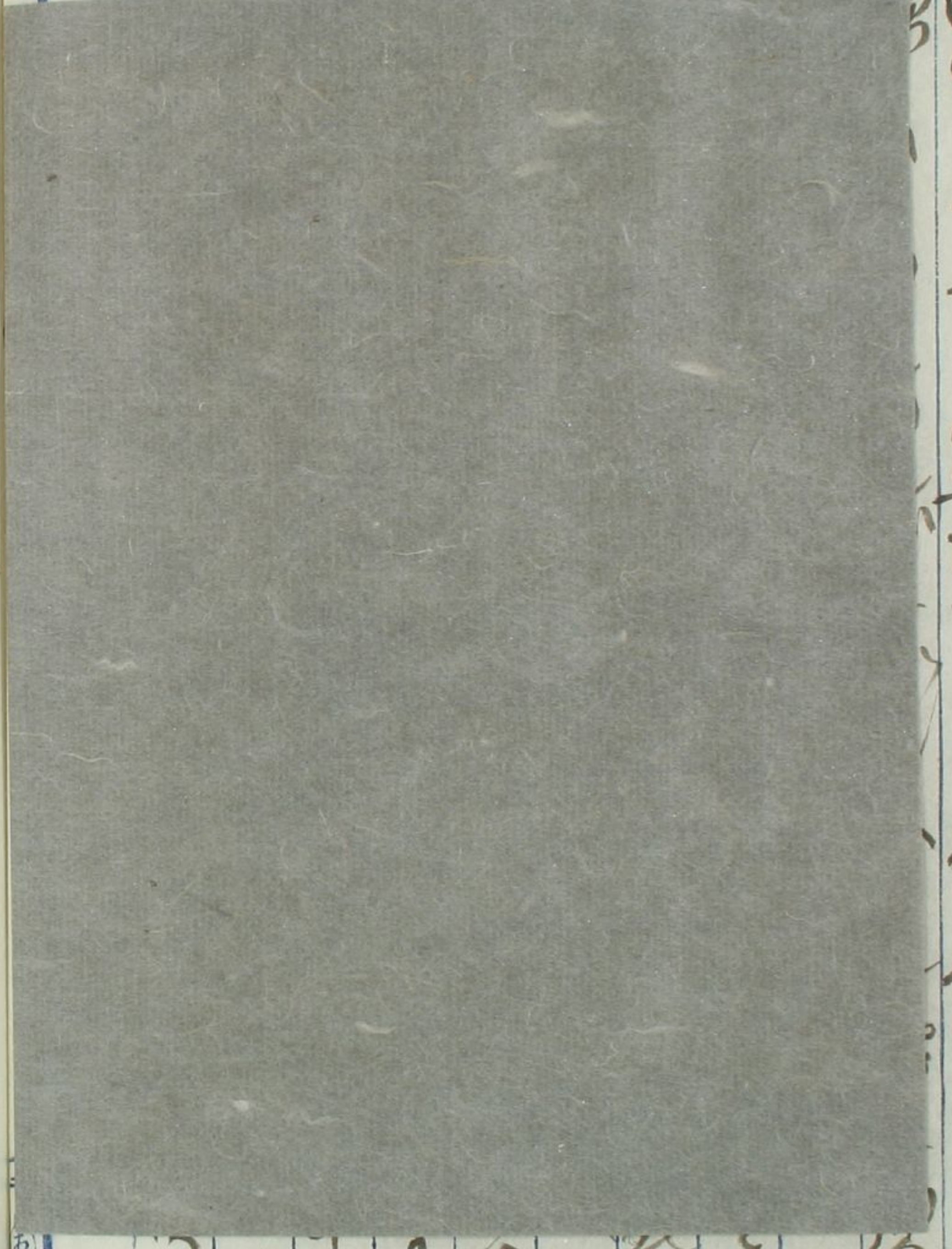
○秀心の上雨沛○衣

心子峰の衣

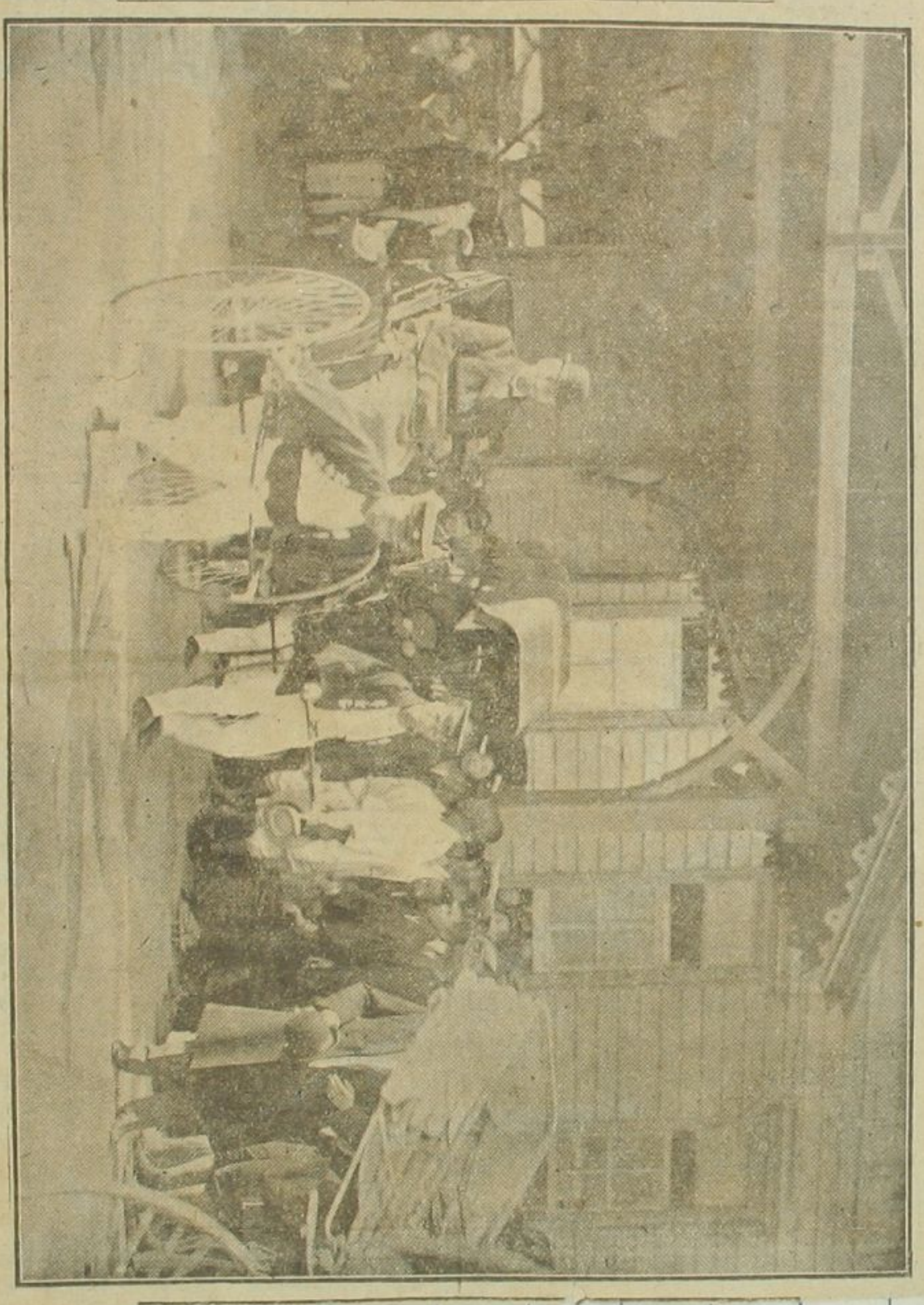
と白の井上と能政大臣の別名

○ 心 土 雨 師 ○ 衣 毛
○ 心 土 雨 師 ○ 衣 毛

と 油 井 上 を 能 坂 大 臣 の 別 名 ち ち ナ ン デ



山 山 名 峰 の 方 名 名



大 隈 伯 金 澤 驛 を 出 せ ん す

ち事んを念ひてうん比、侍婢と令りて居しと今を
仰久人の教習とんとすも、仰とぬ大らうとここを
ハるい、えとお泊めせん比うう日、編りて其し
く無の杉木の御方へとお表い、ううと今を
彼方、醫者へし免てうをううううううううう
の杉木家の別荘を美ら洗館とすうううう
大規模のとりううう、庭をうううううううう
高物へ出来て比比愉快を免くと、概して云
を池う園の八九人うにぬえ比を池の肉園
の附木う折付とんとしぬつてすあゆうう大
なううううううううううううううううう
あまう橋う架うとあううううううううううう
池のついき

うううううううううううううううううう
こころうううううううううううううううう
来れとゆえしく材木をとりてあゆうううう
ううううううううううううううううう
あまうううううううううううううううう
預子ひ世年、流居尾の地元の的らひ七別に
室をうけるうううううううううううう
ゆる方面、御ううをうううううううう
柱をゆうううううううううううううう
柱のううううううううううううううう
ぬか見しとて家道の流しをううううう
的ううと杉木のううううううううううう

午後の御座をさげしきり今も物とさうなぐり
 入打れり

福井の地を歩むと、その風景は、
 七者七北の北陸のと福井を交ぬると
 物事しきり也

ゆゑの早急なや、その中、
 の旅中、のさそを執らんことを即ち
 海流を中記り、之を、
 く



精力絶倫なる
 大隈伯

(北陸巡遊中の偉観)

本部主幹 市島謙吉

精力絶倫なる伯の感化 余が大隈伯の旅行奉
 行として、各地を巡遊したることは度々である
 が、其経験によると、伯の如き精力絶倫の人に
 随伴して旅行する責任は頗る重大で、その任務
 は恰も汽車の車掌と異ならない。連続せる豫定
 時間を、球数つなぎに徒のない様に利用するの
 いふ、極めて嚴格に且つ敏速な手筈を要するの
 で、少からざる頭腦を働かすのである。伯は朝
 五時に起き夜の十二時過ぎ迄も就眠せられない
 それで或場所に達すると多数の群衆に圍繞せら
 れ、殆ど時の過ぐるを知らないといふ有様であ
 る。然るに此時間を豫定通に違算なからしむる
 には、伯がそれからそれと次の行事に移らるゝ

新 天 地

様、寸時も傍を離れずして、絶えず時計を視計
 らし、伯の演説を適當に切上げて貰ふといふ調
 節をする。又或場合には臨時の行動に對して臨
 機應變の所置をとらねばならぬこともある。か
 く繁劇を極むる結果睡眠不足を生じ、動もする
 と神經衰弱を起し、疲勞に堪へざる筈であるが、
 しかもそれ程苦痛を感じないのは、抑何故であ
 るかといふに、是れは全く伯の偉大なる精力に
 感化せられ、伯の快活にして陽氣なる元氣に刺
 戟せられ、自から繁劇を苦にせぬ様に激勵せら
 るるの感化が、如何に大なるかに驚かざるを得ない。
 間斷なき活動 伯が地方の巡遊に對する趣味
 は普通人と異り、知らぬ名所舊跡を見ようとか、
 又は都市山川の風景を愛するが爲めといふ様
 な、そんな呑氣の沙汰を好まれない。伯は官民
 各種の多數人に接觸するを以て無上の趣味と
 し、之を旅行の主義目的とせらるゝ。而して短
 時間と雖も成るべく之を利用して、有らぬ方

三

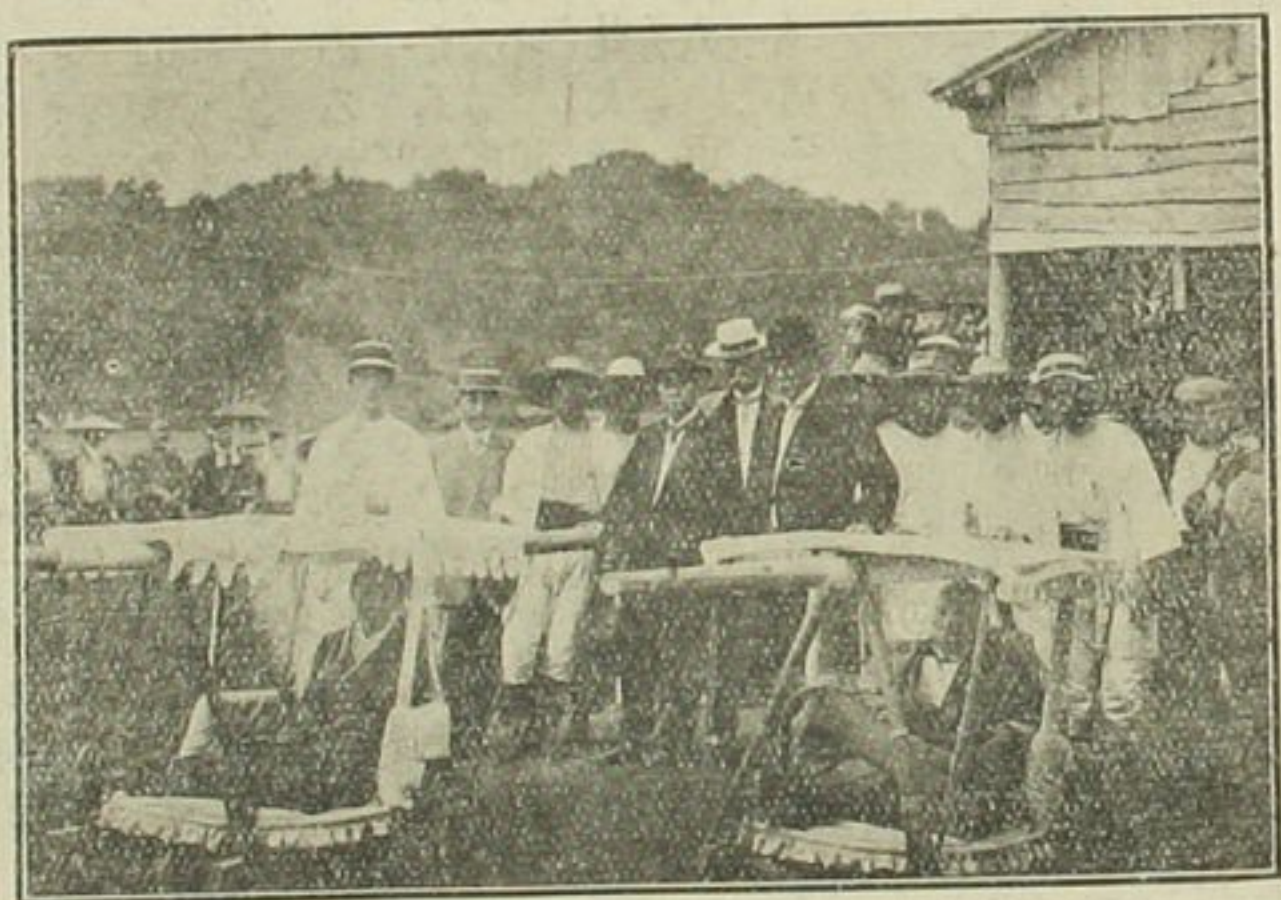
千代子の...

面の人士に及ぶ限り、その感化を興へようといふ點に、多大の趣味を有つて居られるのである。そこで随伴者の先づ第一に心得べきは、伯は七十有餘の老人なるが故に、定めて疲勞があるだらうといふので、幾許か休息時間を取るの筈であるが、此は却て伯の希望に撞着するといふことなのである。伯は十分間といへども何等爲すことなく時間を徒費し、徒然の状態に置かるゝを、最も不愉快に感ぜられ苦痛とせらるゝ。故に日々朝は六時より晚九時迄の時間を、間斷なく行動し、殆ど中間に十分二十分の少時間と雖も、之を何等かに利用せざれば満足されぬ。十一日間七十九回の講演、以前伯は左程でもなかつたが、近來に至り益々時間を貴重視し、間斷なく活動を督勵せらるゝ。例へば朝幾時かに某所に出席の豫定があると、その豫定より三十分程前から、頻りに督促せらるゝは伯自身からで、左右の者は殆どそれが爲に周章準備に着

手するといふ位、此が日に何回も繰返へさるゝのであるから中々繁劇である。今回伯の旅行は九月十日より同二十三日朝に終り、その経過した土地は先づ新潟縣の大部分に亘り、續いて富山、石川、福井の三縣に及び日数は十三日間に亘れるが、その中前後の汽車に乗れる時間大體二日間を控除すると、正味活動の時間十一日間、此間に伯の講演せられた回数七十九回、尤も此は長短混じての計算であるが、先づ大衆を會し得る一日の講演回数五乃至六回で、その外例へば汽車に搭乗中と雖も、停車場に停留時間があれば、到る所群衆の要求を容れて、十分乃至十五分の演説をせられ、地方の群衆を満足せしめられる。各驛に於ける演説、越後にありては十三驛間に於て七驛に下車し、雲霞の如く群衆の歡迎者に列車停留時間は三十分停車の個所纔に一驛ありしのみ、他は皆三分若しくは五分の短時間なるに

拘はらず、心は同じ伯を欽慕せる群衆の懇請を快話せられ、一々演説せられて少しも之を煩とせられない。遂には新潟市の如き鐵道の驛員が一團をなして、伯が維新の鐵道創立者たるの故を以て、一場の講演を要むることとなつた程で、斯様な特殊の團體に迄も常に有益な教訓を與へられたのである。伯の汽車にて通過する大停車場には、必ず種々の趣向を凝らした大歡迎がある。伯はその驛々に於て演説するのであるが、その演説は當意即妙といふべく、皆その土地相應のことを論せられ、決して同じ事を異つた所で繰返すが如き單純なものでない。さ

(一)眞寫遊巡伯隈大
物見田油山西近附崎柏



頃て又日々豫定の講演に就いては、凡そ朝八時より午前は概して三回、午後も引續き二三回、各驛に於ける演説、越後にありては十三驛間に於て七驛に下車し、雲霞の如く群衆の歡迎者に列車停留時間は三十分停車の個所纔に一驛ありしのみ、他は皆三分若しくは五分の短時間なるに就いては、凡そ朝八時より午前は概して三回、午後も引續き二三回、各驛に於ける演説、越後にありては十三驛間に於て七驛に下車し、雲霞の如く群衆の歡迎者に列車停留時間は三十分停車の個所纔に一驛ありしのみ、他は皆三分若しくは五分の短時間なるに

新天地

生に對しての講演は伯が悦んで試みるゝ氣味がある。何時も中學生の會合は何時からであるかと問はれたり、此處には中學生の演説會はなきやなど尋ねられ、伯が自ら求めて之に親近せられ、談話をせられようと望まると、風がある。従つて中學生が會することがないと、何となく不愉快に感ぜらるゝ様に見受けられる。停車場などに中學生が伯を迎へて居ると、伯は悲々之に近接し、一々愛嬌ある言葉をかけられる。「好い兒供だ」とか「大分元氣あつて可い」とか「此は中々體格がよい」と言はれる。中に脊の高い兒供が居ると、特に自身之に近附き頭を撫で、行かると、此は伯が殊更にせられるのでなく、衷心から中學生に對するの至情が溢れて、斯の如き態度に出でられるのである。隨つて伯の中學生に對しての講演も常に同情を以て充ち、伯は國家に中等國民の大切なることを説き、中等教育の國家に最も重要なことを盛に敷衍せらるゝのが例である。而してその敷衍せ

らるゝや殆ど天籟の如く中學生の頭腦に響き、極めて高尚なることを、縦横に比喩を引き來つて説かるゝので、學生は爲に酔へるが如き状態に深き印象を與へられる。伯は知育體育體育中重きを體育に置かるゝ、少し位學問は出來なくとも、徳育と體育とが充分であれば決して差支ない。今の教育制度が動もすると形式に流れ、體育の最も大事なる年輩に對し、嚴格なる試験を施す結果、遂に體格を害して終生之れを恢復すること能はざらむるは不可なりと論せられ、その談の文に諧謔口調を交へられ、落第しても可くないが、まあ、好い加減に及第する位にやれ、吾輩などは試験を餘り窮屈に受けなかつた結果、斯く體格が良し。吾輩今日既に老いても尚ほ書生である。勉強の點に於ては決して諸君には負けぬ。老年になつても勉強の出來る様に學問するのが、眞の勉強といふものである。更に附加して「自分の如く偉く成るには、怎して體格を養ふのが肝要である。詰らぬ形式

〇
〇
〇
八

の試験にくよくよするは以ての外である。學生の喜びは一通りでない。見渡せば滿堂の學生悉く喜色滿面此一語丈でも終生伯を忘れ難ぬの概がある。形式的教育の弊を喝破す。伯は更に傍にある教員を振り返り「どうか教員諸君も餘り學生を虐めぬ様にして貰ひたい、此が吾輩の特別な希望である」と懇囑せらるゝので、學生は一層喜びに堪へぬ趣が見える。伯の斯の如き演説は或は一場の學生に對する人氣取の様に思ふ者もあるやも知れぬが、確に近來の教育制度が形式に流るゝの弊を喝破せられたので、伯の如き人によつて初めて忌憚なく此言を發し得るのである。唯勉強せよとのみの訓戒は日常聽いても居よう、又大學者等が時々地方を漫遊し話さるゝことも、恐く勉強せよといふ範圍を脱し得ないのに、此は空谷の登音であつて、稀に聞かざるべき大福音とも云ふべきものである。此は一面に於て教育の通弊を戒め、伯の平生の主張を表

はすと同時に、又全く中學生の前途に重きを置かるゝ同情より起る言論といはざるを得ない。斯くの如き誠意の籠つた講演を聴く中學生は、宛も親切なる父老に會したる如き心持が生じ、總に一場の演説で直に伯と懇意なる關係を結ぶ。そこで伯が市中を往來すると、學生は伯を出迎ふ毎にニコ／＼して、恰もその祖父に會するが如く、鄭重に脱帽して之に答禮する。斯の如く伯は到底中學生の最も敬愛する友人であるから、伯が別を惜み見送をする。伯が今回の巡遊中に接せられた老幼男女の数は四縣に亘り、優に十萬を超えて居る。新潟縣の如きは最も多數の人が伯に會するを得、富山、石川その他に於ても、新潟に



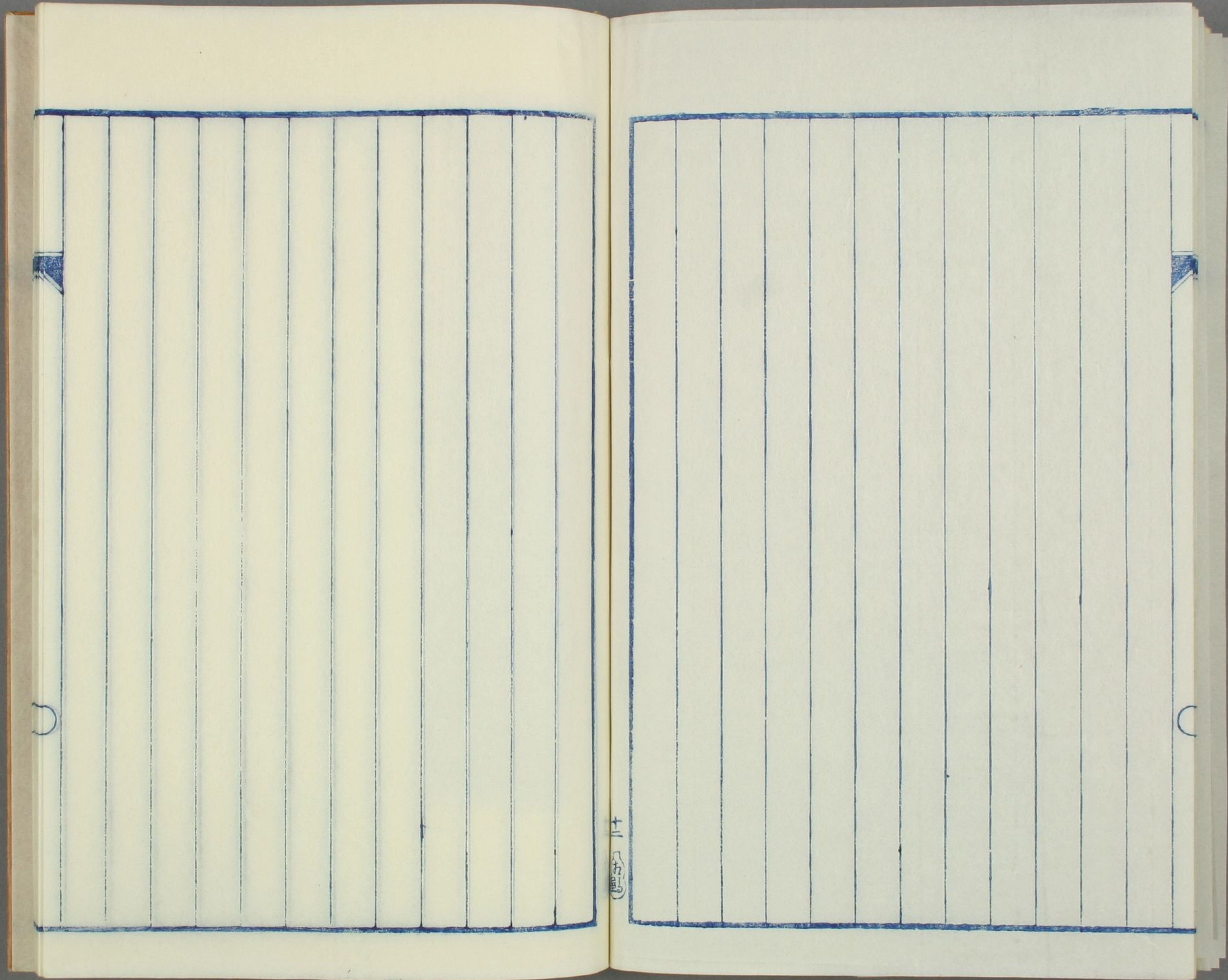
譲らぬ盛況を呈し、富山に於ては伯の記録に、
新に記載さるべき出来事が起つた。其は富山市
の本願寺別院に催はされた、戦死者追悼大講演
會に於ける事件で、午後三時の開會といふに、
早朝から遠近の群衆來集し、午前中に満堂とな
つた。後れ走せの人々は廣い境内に人の山を築
き、定刻に至つて伯一行門に入らんとするに、
その通路を塞がれ車を進むことが出来ない有様
であつた。此等の群衆は堂に入る能はずして、
空しく失望せるものなれば、伯の後に隨へる余
は、此等の人々を空しく歸らしむるを氣の毒に
考へ、伯に車上一にて一場の演説を試みられんこ
とを乞うた。伯は「宜しい」と頷かれ、車上より
此大群衆に四五分の演説をせられたので、一同
非常に満足し、大喝采の中に沙の流るゝ如く退
散したるは、嘗て見ざる壯觀にして、伯の俾上
演説は新記録の第一頁であらう。



● 讀書と常識の涵養

本大學商科長 田中穂積
教授法理博士

現今の日本の青年は泰西の青年又は明治維新
前の青年に比し、少からず常識と云ふ點に於て
劣つてをる。世人が今日の日本の青年は早熟で
あると云ふが、維新前の青年に比し、又は西洋
の青年に比し、決して早熟とは云はれぬ。寧ろ
晩熟と云はねばならぬ。其れは無理の無い事
であつて、現今では小學校を卒業すれば、直に中
學に通ふと云ふ教育の方法であるに由つて、十
八九歳の頃に於て殆ど社會と云ふ物を知らない
のである。即ち學校へ通ふのに、下宿から通ひ
又は寄宿舎にあつて學んでゐる。或ひは自分の
家庭から通學する者もあるであらうが、假令自
分の家から通學するにしても、たい眼中學校の
課程があるのみで、他に廣く眼を轉じようとは
しない。郷黨の先輩とも交はらなければ、また
廣く好んで社會の事物に通せようとならないので

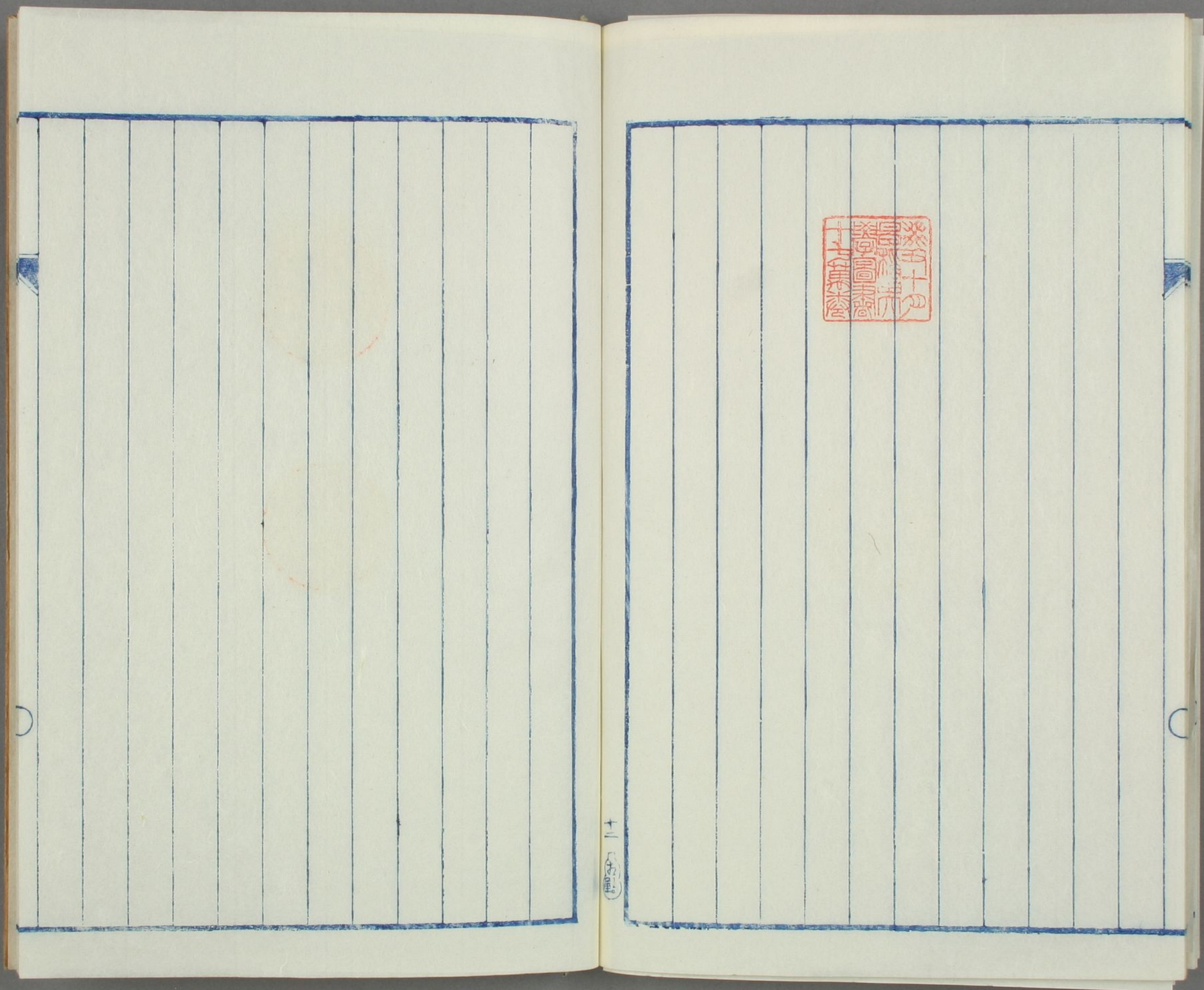


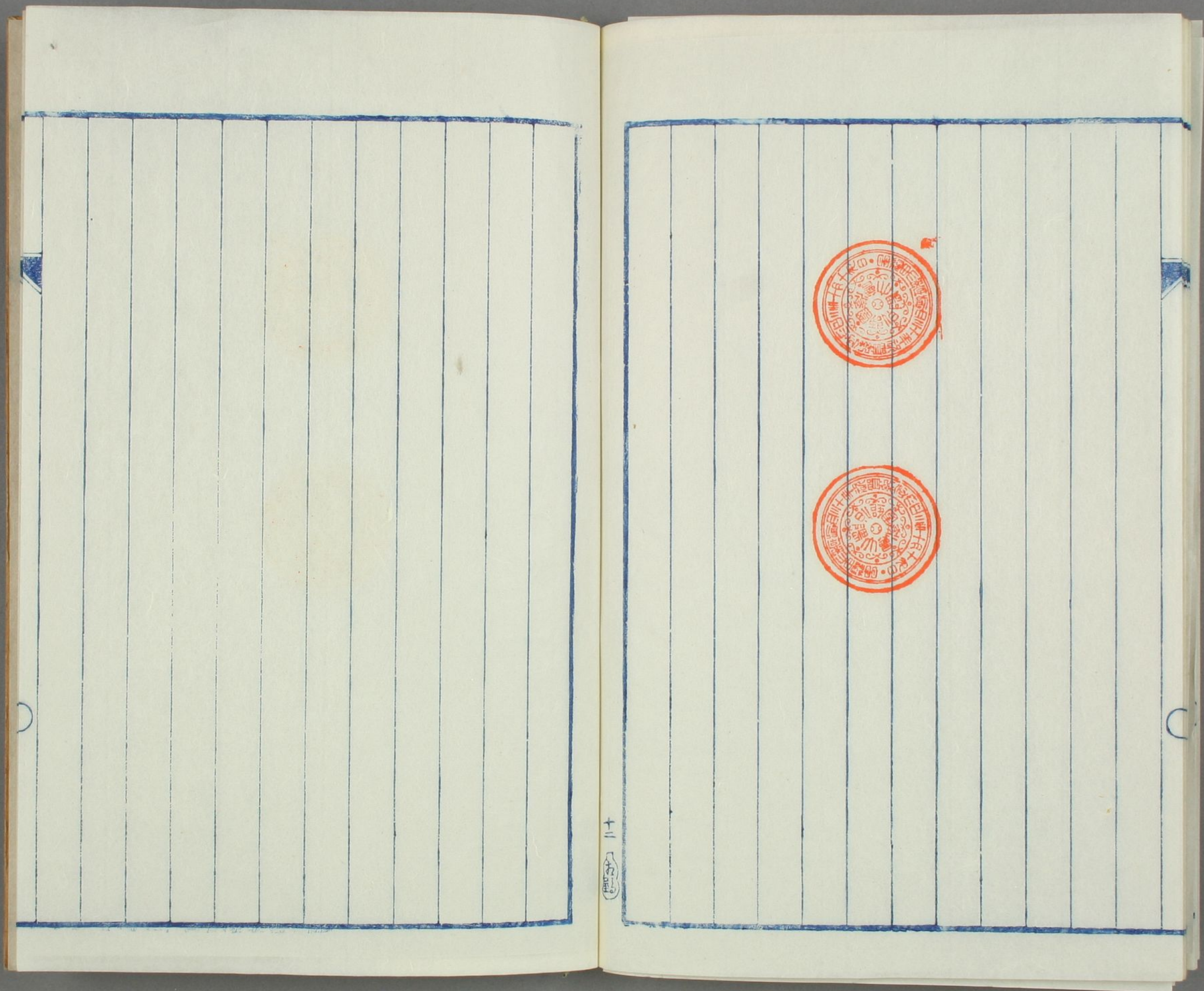
十一

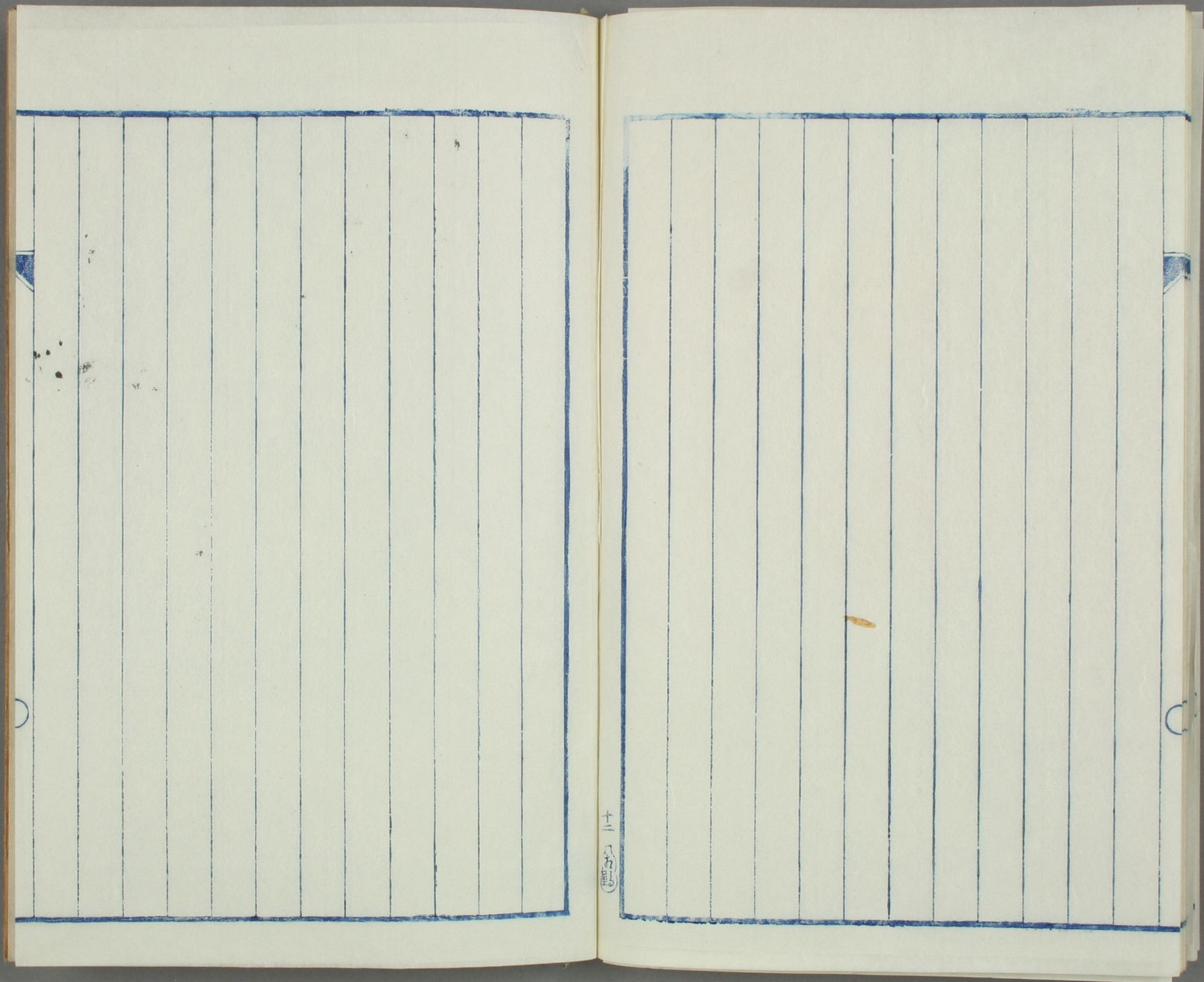
以下

6 丁

白紙





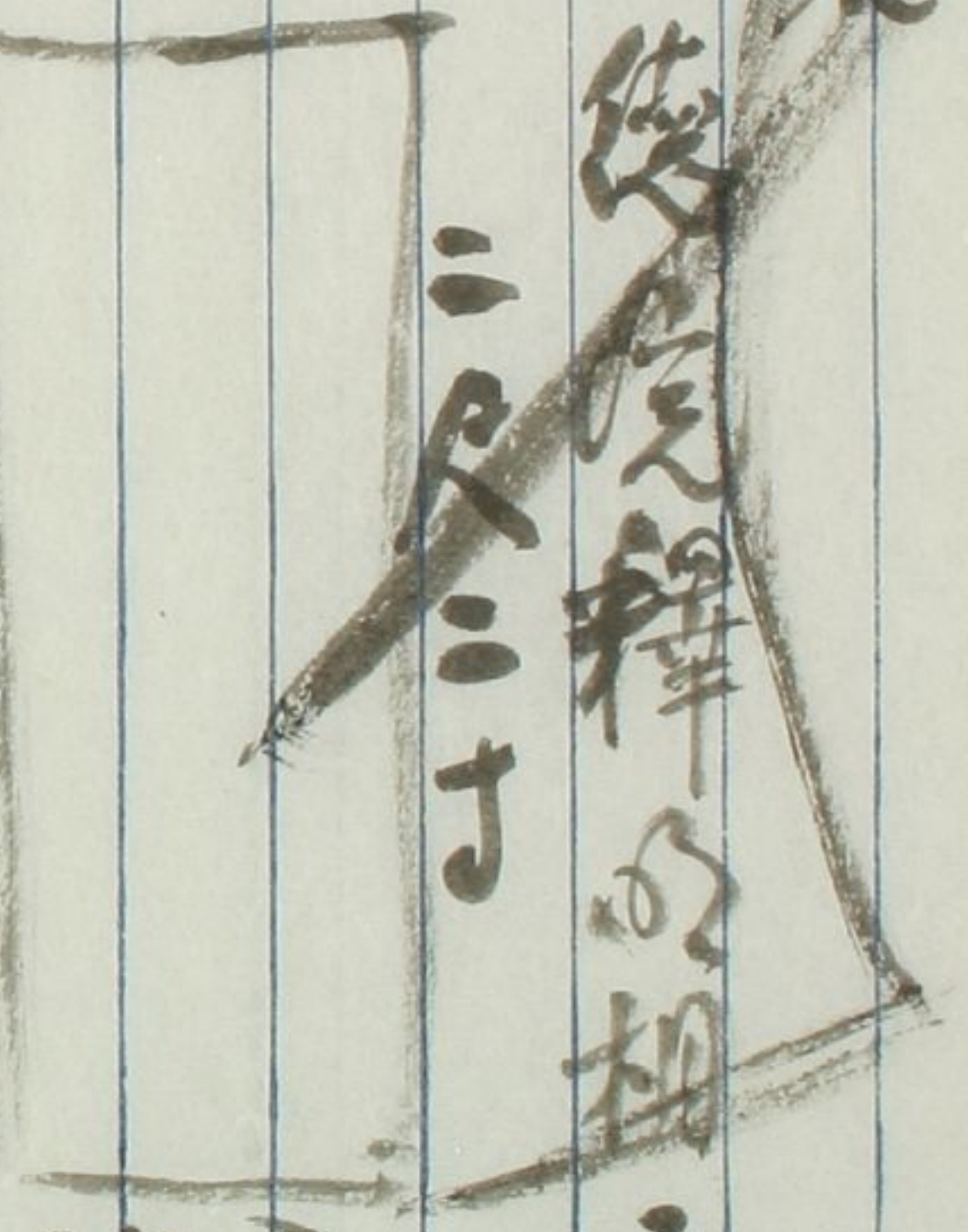


十二
八月

亡才法

喪禮の相見

二尺三寸



一尺二寸

仰の状況

一尺二寸三寸

カサの状況

一尺二寸

今より祝の状況

一尺二寸

